

学校の今に寄り添い、先生方とともに未来を描く

〔ビューネクスト〕高校版

VIEWnext

2022
August

8

Photo Session at Cover

宮城県
登米総合
産業高校

特集

新学習指導要領下の

授業改善

— 真に組織的な

取り組みにするための

4つのポイント

指導変革の軌跡

埼玉県・私立

春日部共栄中学高校

発問・課題設定をキーに見る

主体的・対話的で深い学び 授業実践

化学

山口県立山口高校

石田純一





写真右から、大平さん、糟谷さん、本田さん、吉田さん。

未来を描く！ 創る！

イノベティブな
生徒たち

第 8 回

社会課題に
取り組む高校生に
必要なマインドは？

「本気で遊ぶ」気持ちで、 町の様々な課題を請け負う！

「まち部。」

糟谷 遙^{かす や はるか}さん(3年生) / 本田和花奈^{さ よ}さん(3年生) / 大平彩代^{あゆ か}さん(1年生) / 吉田歩花^{あゆ か}さん(1年生)

奈良県・大和高田市立高田商業高校

魅

力的な地域資源を掘り起こして発信したり、地域資源を活用した特産品の開発をしたりするなど、生徒が町の様々な課題に取り組む奈良県・大和高田市立高田商業高校の「まち部。」。「部」と名乗って

はいるが、ほかの部活動のように固定の部員が定期的に活動するわけではなく、プロジェクト単位での活動をベースとしており、プロジェクトごとに参加する生徒は異なる。

現在、「まち部。」が抱えるプロジェクトは11件。生徒が立ち上げたものもあれば、企業や団体から持ち込まれたものもあり、延べ約100人の生徒が参加中だ。

プロジェクトの内容は多種多様。1年生の大平彩代さん、吉田歩花さんが取り組むのは、コロナ禍で販路を失った野菜を売ることで農家を助けるとともに、その収益の一部を、大和高田市の姉妹都市で、100年に一度の豪雨に見舞われたオーストラリアのリズモー市に寄付するプロジェクトだ。3年生の本田和花奈さんは、SNSによる地元青果店の広報活動の支援に取り組む、同じく3年生の糟谷遙さんは、大手コンビニ

読者の先生方がご存じの「イノベティブな生徒たち」をご推薦ください！

ご推薦いただける場合は、右の2次元コードをスマートフォン等で読み取っていただき、フォームに沿ってご推薦内容をご入力ください。



教師たち



奈良県・
大和高田市立
高田商業高校
進路指導部
としたが
大島利隆

社会を変える経験を 高校時代に積ませたい

社会には解決が簡単ではない問題がたくさんあります。だからと言って高校生は無力なのかというと、そうではありません。むしろ、できない理由をまずは考えてしまう大人よりも、高校生は大きな可能性を持っています。ですから、「まち部。」の活動を通して生徒に知ってほしいのは、世界は自分たちの手で変えられるということです。「まち部。」の生徒が根気強く活動に取り組めるのは、問題の解決そのものが楽しいからです。学校の名物を全国に知ってもらうために、新商品を大手コンビニエンスストアに提案した生徒たちは、「コンビニが駄目なら、次はピザチェーンにあたろう」と、次の策を考えていました。それこそまさに「本気の遊び」です。遊びのように楽しんでいるから、生徒はアイデアを次々に生み出し、「駄目なら次へ！」と常に前を向いて、この社会を変える活動を続けられるのです。

プロジェクトは、どれも実社会と結びついたものばかり。当然、想定通りには進まないこともあるし、苦勞も多い。野菜の販売では、農家から送られてきた野菜を、どう

「高田商業高校には、新入生の歓迎行事として、上級生がすすき焼きを作り、新入生に振る舞う伝統があります。2年前に『まち部。』の先輩が、そのすすき焼きをレトルト化して販売を始めましたが、私たちはレトルトすすき焼きの知名度を上げようと、コンビニエンスストアの本部に『すすき焼きおにぎり』の企画を持ち込みました」（糟谷さん）

すれば鮮度を損なわずに保管・販売することができると頭に悩ませた。青果店の広報活動では、若い世代が実際にお店に足を運んでみようと思わせるものにするため、何度も投稿内容の修正を繰り返し返した。「すすき焼きおにぎり」の開発では、プロジェクトに参加する生徒間で意見が分かれながらも、「おいしさ」という答えが1つではない問いに向き合った。

かわる人の数が増え、その人たちの立場が多様になればなるほど、意見が衝突することも多くなるが、それでも生徒たちが頑張り続けることができるのは、自らの意思で参加したプロジェクトだからだ。担任の

教師から、「今度、こんなプロジェクトが始まるよ」と紹介されて、興味を持った人だけが参加する。そもそも、「まち部。」への参加自体が自由だから意欲を持って最後まで取り組めると、生徒たちは口をそろえる。

社会には見過ごせないたくさんの課題があることに気づく。そして、教師や町の人々と一緒にそうした問題の解決に取り組む中で、「未来」をよりよく変えていくための力を身につけていく。いや、「未来」だけではない。生徒は、「今」も変えていくのだ。



2022年6月、コロナ禍で販路を失った長芋とごぼうを販売する生徒の様子。姉妹都市に約12万円の寄付金を送ることができた。

学校プロフィール

設立 1954（昭和29）年
形態 全日制／商業科／共学
生徒数 1学年約200人
2021年度進路実績（現役のみ）
国公立大は、金沢大、長崎大、横浜市立大、大阪公立大などに37人が合格。私立大は、中央大、明治大、同志社大、関西学院大などに延べ141人が合格。短大・専門学校進学38人。就職29人。



3

特集

新学習指導要領下の
授業改善
——真に組織的な
取り組みにするための
4つのポイント——

巻頭 未来を描く！ 創る！
イノベティブな生徒たち
「まち部。」
糟谷 遙さん（3年生）
本田和花奈さん（3年生）
大平彰代さん（1年生）
吉田歩花さん（1年生）
奈良県・大和高田市立高田商業高校

42 これからの進路指導のための
世の中トレンド解説
トレンド・ワード
メタバース

60 Reader's VIEW

<https://view-next.benesse.jp/>

本誌記事は、ウェブサイトVIEWnext ONLINE でもご覧いただけます。

印刷製本／（株）協同プレス
編集協力／（有）ペンダコ
執筆協力／二宮良太、長谷川 敦
撮影協力／熱田智寿佳、荒川 潤、木村琢磨、福山 哲、ヤマ
グチイッキ

※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬
称略とさせていただきます。 ※本誌記載の記事、写真の無断
複写、複製及び転載を禁じます。

©Benesse Corporation 2022

27 For School Section

28 お勧めの分掌▶ 管理職 教務担当 進路担当

指導変革の軌跡

埼玉県・私立春日部共栄中学高校

考査・授業時程・学期制の改革

中間考査廃止 # 単元テスト # 完全週5日制 # 45 分授業

32 お勧めの分掌▶ 管理職 教務担当

——疑問や課題を解決！実践につながる！—— 新課程レポート

テーマ 生徒とともに深める観点別評価

広島県立安芸府中高校

ルーブリック # 生徒とつくる評価 # 三者懇談でプレゼン

36 お勧めの分掌▶ 学年団 担任

輝く学年団を訪ねて

北海道・私立札幌第一高校 2021年度3学年団

自律的な学習を促す # 進路コンパス # 学校が大好きな生徒

40 お勧めの分掌▶ 管理職

学校危機管理 基礎講座

テーマ 学校管理下での事故

大半が部活動と保健体育 # ヒヤリ・ハットを軽視しない # 生徒への安全教育

43 For Teacher Section

44 お勧めの分掌▶ 教務担当 担任

発問・課題設定をキーに見る 主体的・対話的で深い学び 授業実践

化学

山口県立山口高校 石田純一

ペアワークが授業の軸 # 生徒がつくる「私の問い」 # 単元ごとの「変容シート」

48 お勧めの分掌▶ 進路担当 学年団 担任

マイ・ストーリーを語る生徒を育む進路指導

岩手県立福岡高校

3年次8・9月 志望理由書の作成・面接指導

面談で志望の掘り起こし # クラス集団の力 # 50 回以上の模擬面接

50 お勧めの分掌▶ 進路担当 学年団 担任

変化の激しい社会に飛び込む生徒に伴走 クローズアップ！ 就職指導

北海道札幌真栄高校

志望先への熱意の言語化 3年次8月・9月（応募書類の作成～面接指導）

大人目線でのリライズ # 自分と企業をつなぐキーワード # 志望理由書を書く視点

52 お勧めの分掌▶ 学年団

チーム新課程学年主任

9月10月のポイント

生活リズムの確立 # 文理選択への意識づけ # アーカイブ配信のお知らせ

新学習指導要領下の 授業改善

——真に組織的な取り組みにするための4つのポイント

高校の新学習指導要領が実施されて4か月が過ぎました。ご勤務校の1学年団や1年生の様子はいかがでしょうか。新学習指導要領の理念を実現する場の中心となる授業については、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの改善が求められています。その視点は、以前は「アクティブ・ラーニング」と呼ばれ、既に多くの授業改善の実践が蓄積されてきました。ただ、そうした授業改善が組織的に進んでいるのかというと、その割合は2割強にとどまっています（弊社の調査結果[*]より）。また、「全教科・科目の授業に、生徒同士による対話の時間を設けるようにしている」など、形式的な面のみをもって「組織的に取り組んでいる」としてしまっているといった声をお聞きすることも少なくありません。かつて「アクティブ・ラーニング」が「活動あって学びなし」と懸念されたように、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの組織的な授業改善が、「形そろえて学びなし」とならないように留意することが求められます。では、どのような状態になっていれば、真に組織的に推進できていると言えるのでしょうか。今号は、その点について、現場の声や識者の見解、4月号の特集に登場した3校の実践を基に考えます。

VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇

P.4 課題整理

教師の「リフレクション」の質を高め、4つのポイントを踏まえて、学校全体で授業改善を推進
国立教育政策研究所 研究企画開発部 総括研究官 千々布敏弥

P.7 実践事例1 千葉県立千葉北高校

育成を目指す資質・能力と評価規準を示したシラバスを、全科目で作成
授業実践 P.8 国語 P.10 生物

P.13 実践事例2 静岡県立静岡東高校

「総合的な探究の時間」の不断の改善が、教科の授業改善にもつながる
授業実践 P.14 総合的な探究の時間 P.16 化学

P.19 実践事例3 広島県立神辺旭高校

マスタートレーブリックを礎に、生徒の主体的な学びを支援する
授業実践 P.20 地理 P.22 英語

P.25 本特集テーマのnext

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることで、
「主体的・対話的で深い学び」を実現
上智大学 総合人間科学部教育学科 教授 奈須正裕

* ベネッセ教育情報センター「教育・入試改革対応に関する調査」（2021年2～3月にウェブとファクスで実施。回答校数 1,024 校）

教師の「リフレクション」の質を高め、 4つのポイントを踏まえて、学校全体で授業改善を推進

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を、真に組織的な取り組みとするためには、何が必要なのか。教育経営学や授業研究を専門とし、学校の組織開発支援に取り組む、国立教育政策研究所の千々布敏弥総括研究官に話を聞いた。

学習者と教師、双方の主体性が
深い学びを成立させる

新学習指導要領で示された「主体的・対話的で深い学び」は、授業づくりの主語を「教師」から「学習者」に転換したことが、実に画期的でした。そうした背景には、

学校が知識偏重の授業からなかなか抜け出せない状況がありました。「主体的・対話的で深い学び」

という言葉により、「教師の指導」ではなく、「学習者にとっての学び」がどうあるべきかを前面に打ち出し、授業のあり方を大きく変えることを意図したのです。

誤解しないでいただきたいのは、学習者が主語になるからと言って、教師の主体性は必要ないということではありません。学習者と教師の双方の主体性が発揮されるところに、資質・能力を育む

「主体的・対話的で深い学び」が成立するのです（図1）。

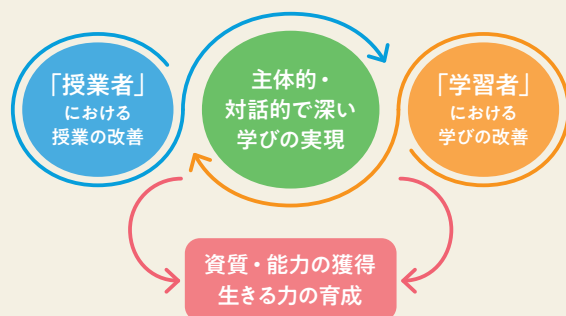
そして、新学習指導要領の解説では、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点からの授業改善によって質の高い学びを実現し、資質・能力を身につけ、学習内容を深く理解し、生涯にわたって能動的に学び続けるようにすることが求められています。

そうした視点からの

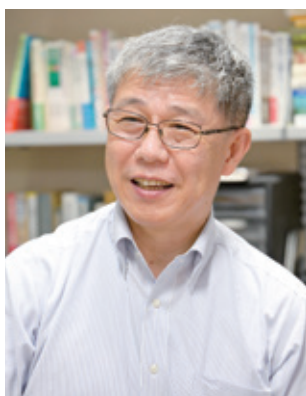
組織的な授業改善は、マニュアルの順守ではなく、教師が「リフレクション（省察）」の質を高めることで実現します。リフレクシヨ

ンには、「技術的」「実践的」「批判的」の3段階があり、教師のリフレクションの質は、学校全体で組織的に取り組み、教師同士の

図1 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた「学習者」と「授業者」の視点の往還



※国立教育政策研究所「主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善の視点について」（2020）を基に編集部で作成。



国立教育政策研究所 研究企画開発部
総括研究官
千々布敏弥
ちちぶ・としや

文部省（現文部科学省）入省後、大学教員を経て、1998年から国立教育研究所（現国立教育政策研究所）の研究官として、都道府県・自治体の学力向上施策の支援などを行う。主な著書に、『先生たちのリフレクション 主体的・対話的で深い学びに近づく、たった一つの習慣』（教育開発研究所）などがある。

図2 「リフレクション」の3つの段階

批判的 リフレクション	学校教育目標や育成を目指す生徒像などを常に意識しながら、目の前の生徒の実態を踏まえて育てたい力を柔軟に捉え、日々の実践に結びつける。
実践的 リフレクション	教室で起きる事実に従い、その問題解決方法を自分で考える。即興的に意思決定をして、生徒に対応。
技術的 リフレクション	マニュアル通りに技術や手法を授業に適用する。生徒の想定外の反応や発言があると対処できない。

※千々布総括研究官への取材を基に編集部で作成。

つながりなどを強めていく中で高まっていくものです(図2)。「技術的リフレクション」の段階にいる教師は、マニュアル通りに技術や手法を授業に適用するだけでは、一歩進んで「実践的リフレクション」に達すると、場面に応じて即興的に意思決定をして生徒に対応します。「批判的リフレクション」の段階では、教科の

図3 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を、組織的な取り組みにする4つのポイント

1 目標・ビジョンを共有する

育てたい生徒像や、育成を目指す資質・能力などを明確にして教師間で共有し、教師の目的意識を高める。

2 共通の指針を設け、授業を構築する

教育委員会や学校が定める授業の指針などを参考にして、学校全体で共通の手法を実践することは、初期段階では効果的。

3 個々に創意工夫する余地を持たせる

教師一人ひとりの発想を取り入れる授業改善を進めるようにし、「エージェンシー(自主性・自律性)」を発揮させる。

4 実践の成果を検証する仕組みを設ける

教師が目標を意識して取り組む姿勢などに着目して、取り組みの成果を検証し、次の課題を見いだす。

※千々布総括研究官への取材を基に編集部で作成。

個人レベルの授業改善を学校全体に広げることが重要

しかし、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善の多くは、一部の教師の取り組みにとどまっているのが現状で、それをいかにして組織的な取り組みにするかが課題です。組織的な取り組み

目標や学校教育目標、育成を目指す資質・能力などを常に意識し、日々の授業に結びつけられるようになります。そのように、リフレクションの質を高める視点が、授業改善には欠かせないでしょう。

組みにするポイントは、4つあると考えています(図3)。

●組織的な取り組みにするポイント1 目標・ビジョンを共有する

授業改善を組織的な取り組みにする上で何より重要なのが、教師間での目標やビジョンの共有です。学習指導要領の理念や自校の教育目標に照らして、授業で育成を目指す資質・能力などを明確にし、その共通認識を図ることが求められます。大阪教育大学の田村知子教授が提唱するカリキュラム・マネジメントのモデル図(※)などを使って、自校の教育目標やそれを達成するために必要な授業

について、自校の教師同士で議論するとよいでしょう。

既に学校教育目標はあると思いますが、形骸化しているケースも少なくありません。形式的、網羅的にならないよう、真に実現したい目標に絞り込み、教科、学年、学校全体の各レベルで、授業のあり方について議論しましょう。

●組織的な取り組みにするポイント2 共通の指針を設け、授業を構築する

教育委員会や学校が、授業改善のために、授業の展開や手法などについての共通の指針を設ける場合があります。それをそのまま実践するのは「技術的リフレクション」であり、理想とは遠い状態です。しかし、リフレクションの質は、一足飛びに高められるものではありません。共通の指針をある程度参考にしながら授業改善を図ることは効果的です。他校が成功した授業マニュアルを導入することも悪くないでしょう。ただし、その状態を続けることは感心しません。少しずつ実践的・批判的リフレクションを取り入れていきます。単元の目標を意識し、自分で単

*『VIEW21』高校版 2016年8月号 P.4～7 参照。
https://view-next.benesse.jp/view_section/bkn-hs/article06465/



元の指導計画を作成してみるとよいでしょう。学習指導要領やその解説、教科書を見ながら、単元の授業構成や各授業の内容を検討する過程で、「自分はどんな授業をつくりたいのか」「生徒が身につけるべき力は何か」などについてじっくり考えることで、各教師の授業力は高まっていくでしょう。

●組織的な取り組みにするポイント③
個々に創意工夫する余地を持たせる

共通の指針を参考にしながらも、教師が個々に創意工夫をする余地を持たせることが重要です。共通の指針に基づいた、「技術的リフレクション」による授業を続ける中で、次第に「こうすればもっとよくなりそうだ」といった発想が生まれることが「実践的リフレクション」です。さらに、それが自分のものになっていくと、「批判的リフレクション」の段階に到達します。そこで重要なのは、教師の自主的・自律的な姿勢であり、「エージェンシー」と呼ばれます。教育目標がしっかりと共有されている学校では、教師の授業スタイルが次第に似通ってきますが、

個々の教師のエージェンシーを尊重すれば、おのずとそれぞれの個性が発揮されます。例えば、「毎授業、生徒が活動する時間を最低1回は設ける」といった一律のルールを設けるのではなく、生徒の状態や学習の目的に応じた判断を認めることで、教師個々のエージェンシーが発揮され、リフレクションの質も高まっていきます。

●組織的な取り組みにするポイント④
実践の成果を検証する仕組みを設ける

授業改善を効果的に進めるためには、成果や課題を検証する仕組みが必要です。そして、検証では、目標を意識して取り組む教師の姿勢に着目すべきです。

生徒が授業の目標を意識すると、授業の終わりに「ここまで理解できた」「次はこれを学びたい」といった振り返りが自然とできるようになります。それと同じように、「どのように授業を変えたいか」といった目標を教師が強く意識していると、成果や課題が明確化します。教師がそうした振り返りができるような検証の仕組みが望ましいでしょう。

教師と同じく、組織も
エージェンシーの発揮が必要

どの学校・教師にも適用することができるとは言えない。学校が置かれている環境や教師の状況などが大きく異なるからです。「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を、組織的な取り組みにするためには、管理職や分掌主任が、自校の授業改善の段階を見極め、取り組みの方向性を定めることが大切です。目標やビジョンは共有されているか、教師個々の授業改善は進んでいるか、教師同士が高め合う関係ができていないかなど、様々な視点で自校の状態を把握してください。

授業改善の進め方も、学校によって異なっていると思います。

例えば、最初に自校の教育目標について議論して、共通の指針を参考に授業改善に取り組み、個々の創意工夫を促していく進め方もあれば、具体的な実践から入り、そこで見えてきたことを基に、目標やビジョンについて考えるといった進め方もあるでしょう。組織にも発達段階がありますから、「これを達成したら、次はこれ」と、状況に鑑みて推進することが大切です。

授業改善を支える授業研究にも、多様な方法があります。指導案の作成に重点を置くのか、指導案は簡略化して授業研究の実施回数を増やすのかなど、自校の状況を踏まえて実施しましょう。個々の教師と同じく、組織もエージェンシーを発揮することで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に大きく近づいていくはずです。

本誌4月号の特集に登場した3校の実践を紹介

次ページからは、本誌4月号の特集に登場した3校が、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善をどのように組織的に進めているのか、4つのポイントに沿って紹介していく。

1

千葉県立 千葉北高校

育成を目指す資質・能力と評価規準を示したシラバスを、全科目で作成

徹底した教師間での議論を経て教育課程を編成し、育成を目指す資質・能力である「7つの北高力」を中核とするグランドデザイン（以下、GD）や、各教科のルーブリックを策定した千葉県立千葉北高校。シラバスの活用を通じて、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が活発化している。

シラバスで学習の到達目標を共有。 その上で、教師個々の裁量を重視

千葉県立千葉北高校は、2021年度、教科ごとに作成したルーブリックを基に、各科目のシラバスを整え、22年度の1学年からシラバスに基づいた授業を行っている。^①各教科のルーブリックには、観点別学習状況の評価の3つの観点（以下、3観点）と、「7つの北高力」（徹底力、課題発見力、思考力、実践力、創造力、協働力、自己改善力）を学習評価の観点として設定し、3段階の評価基準を示した。それを踏まえて、各科目のシラバ

スには、学習の到達目標や計画、科目のルーブリック、評価の方法・材料・方法を明記した（図）。各科目の評価は、教科の到達目標に基づくものであり、その目標は「7つの北高力」につながっている。それら^②を評価規準としたルーブリックを作成することで、各教科が評価の説明責任を果たせるようにした。また、^③ともすると、日々の授業では、育成を目指す資質・能力への意識が薄れがちだが、「7つの北高力」を結びつけたシラバスに

よって、教師も生徒も、育成を目指す資質・能力を授業で意識できるようにした。

^④科目担当者は、シラバスに基づいて授業案や教材、評価方法などを決めるが、そのやり方や手立ては各教科に任されている。例えば、英語科では、綿密な指導計画の下で教師間の足並みをそろえている。理科では、同じ科目でも異なるワークシートを使うなど、教師の裁量権を大きくした。学校全体での「7つの北高力」と各教科の学習目標の到達度は、年2回の「主体的・対話的で深い学びに係る生徒の自己評価アンケート」で検証する予定だ。

図 科目のシラバス「現代の国語」(抜粋)

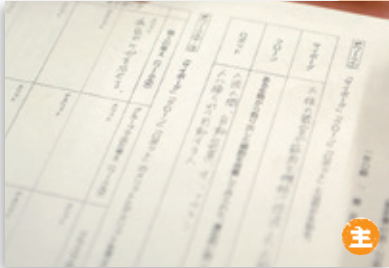
1 学習の到達目標				
言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、言語的・論理的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。				
(1) 社会生活に必要な言語の知識や技能を身に付けるようにする。				
(2) 論理的に考える力や深く考える力、他者と関わり合う中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを適切に表現したり理解したりすることができるようにする。				
(3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者と社会に関わり合う態度を養う。				
2 学習の計画				
月	育成する資質・能力	単元名	学習項目	評価材料
4	「国・言語・文化・社会の特性や価値、言語の特色を踏まえ、正確な、分かりやすい、適切な、敬重と傾かしなどに配慮した表現や言葉遣いについて理解し、使用し、	国語基礎『ふしぎと人生』	筆者のものの見方や感じ方を理解するとともに、自己を見つめ、自己の生き方を模索するきっかけを得る。	授業態度 ・小テスト ・定期テスト ・読書検定

※学校資料を抜粋して掲載。



同校の新教育課程及びその編成に向けた取り組みは、本誌4月号・特集P.8～11をご覧ください。

13:24 3つの言葉の意味を調べ、定義を共有



生徒は各自、サイボーグ・クローン・ロボットの意味を辞書で調べた。挙手をした3人が、それぞれ調べた内容を発表し、言葉の定義を全体で共有した。次に、その3つが、人間の生活に入ってきた際に生じると思われるメリットとデメリットを個人で考えた。

13:20 到達目標を提示



堀井先生は、素材文とその筆者について紹介し、本単元の目標が、「筆者の考えを踏まえて、科学が人間の生活に影響を及ぼした例を考えて文章化すること」だと説明。本時の目標は、「サイボーグ・クローン・ロボットについて理解すること」だと伝えた。

国語

生徒同士による対話を中心とした授業で、単元の学習内容への関心を高める

本時の概要

【対象／教科／科目】1年生／国語／現代の国語 【分野・単元】山崎正和『サイボーグとクローン人間』（全4時間のうちの1時間目）
 【育成を目指す資質・能力】思考力、主体性 【学習内容】素材文に登場する「サイボーグ・クローン・ロボット」の違いを調べ、それぞれが人間の生活に入ってきた際に生じると思われるメリットとデメリットについて個人・グループで考え、それを共有した。

シラバスの到達目標を意識して授業を構成

国語科では、シラバスを通して学習の到達目標を共有しています。シラバスに掲載している「評価の観点」では、3観点と「7つの北高力」をひもづけているので、各科目とGDとのつながりが分かりやすくなりました。本時は、「7つの北高力」のうち、3観

点の「思考・判断・表現」にひもづく「思考力・実践力・創造力」の育成に重点を置きました。そして、シラバスで学習の到達目標として挙げている「他者とのかわりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりする」ことを特に意識して、授業を構成しました。

「現代の国語」は4人で担当していますが、教材と評価の材料（授業態度・小テスト・定期考査・提出物）は科目共通にしています。評価の材料の1つである単元末の課題は、シ



1学年担任
堀井瑞紀
ほりい・みずき
教職歴10年。同校に赴任して6年目。国語科。

- 主 主体的な学び
- 対 対話的な学び
- 深 深い学び

ラバスを作成した段階で担当者間で話し合い、おおよその内容を決めました。例えば、本時の単元では、「筆者の考えを基に、科学技術の発展が人間の生活に影響を及ぼした例について考え、文章にまとめる」といった課題を設定しました。講義形式か、ペアワークなどを取り入れるかといった授業の方法も、シラバスに明記しています。

シラバスで授業の方向性を統一しつつ、授業の進め方自体は教師の裁量に委ね、個々に工夫を凝らしています。本時では、素材文を読解する前に、読解のポイントとなるサイボーグ・クローン・ロボットの違いと、それらが私たちの生活に入ってきた場合のメリットとデメリットについてグループで話し合わせましたが、それは私個人の工夫です。授業の中に一定の裁量がある方が、教師の持ち味や得意分野を発揮することができ、教師としてのやりがいを感じられます。

科目のシラバス、単元の指導計画は、VIEWnext ONLINE に掲載。「TOP → 学校教育情報誌『VIEW next』 → 高校版バックナンバー」または、下記2次元コードからご覧ください。



私の 授業改善の展望

本校には、自分の考えは持っているのに、それを口に出して表現することができない、あるいは、簡条書きにしかできない生徒が多いと感じています。生徒同士で対話をさせたり、思考を言語化させたりする活動ができるだけ行うことで、自分の考えを言葉で表現し、他者に伝える力を育んでいきたいと考えています。

そうした活動に生徒が主体的に取り組むように、個人ワークや対話を通して出た生徒の考えを踏まえて、発問や授業展開を柔軟にすることが、私の課題です。GDに示されている「自ら学び、自ら考え、自ら創り出す」生徒を育むためにも、生徒自身が主体となって授業をつくっていくという意識を、生徒一人ひとりに醸成することが重要だと考えています。

13:49 各グループの発表と 素材文の読解



各グループの代表者がグループの意見を黒板に書き、生徒がサイボーグ・クローン・ロボットに関する自分の考えを整理したところで、堀井先生が素材文を音読。生徒は、各段落が3つのどれについて書いているのかを確認しながら音読を聞いた。

13:40 メリット・デメリットを グループで話し合う



4人1組になり、各自が考えたメリット・デメリットを発表。聞き手は、発表者の考えをワークシートに書き留めた。「サイボーグは、体の不自由な人のためになる」「ロボットは、仕事の効率を上げるけれど、人間の仕事を奪う」といった意見が出ていた。

深い読解に向けてレディネスをそろえる

本時では、「主体的・対話的で深い学び」のうち、「対話的な学び」を重視しました。国語科では、生徒が自分の考えを持ち、それをグループやクラス全体で共有し、筆者の考えを踏まえて自分の考えをより深めていくことを「対話的な学び」と位置づけています。サイボーグ・クローン・ロボットそれぞれの定義とメリット・デメリットをグループで考えることで、筆者の主張がイメージしやすくなると思いました。辞書に書かれている「身体の一部を人工物にした」というサイボーグの定義から、医療で使う器具をサイボーグの例に挙げた生徒もいました。次時以降で、「自分はこう考えた。では、筆者は……」といったように、より踏み込んだ読解ができることを期待しています。

また、本時の活動で、生徒がどの程度の知

活動中心の授業に手応え

識を持っているかを私が把握することができたので、それを次時以降の授業展開に生かしていきたいと思っています。

昨年度まで、私は講義中心の授業を行うことが多かったのですが、シラバスに記した「他者とかかわりの中で伝え合う力を高め」るために、生徒が話し合う活動を取り入れるべく、授業改善に臨んでいます。国語科全体でシラバスを作成したことで、「主体的・対話的で深い学び」の視点を授業に取り入れやすくなったと感じています。

そして、3つの単元を終えた現在、生徒の主体性を引き出し、思考を深めるためには、活動中心の授業が効果的だと感じています。今後も、国語科内で指導のノウハウや生徒の状況を共有しながら、生徒が主体的に学ぶ授業づくりをしていきたいと思っています。

11:50

DNA に関する 2つの課題に取り組む



主
対

ワークシートを基に、1つめの課題「RNAとDNAとの違い」について、個人で考えた後、席が近い生徒同士で答えを確認。2つめの課題「DNAの塩基配列に基づいてRNAが作られる転写のプロセス」についても、席が近い生徒同士で確認した。

11:45

前時の復習と 学習内容の提示



主

森谷先生は、生徒に問いかけながら、前時に学んだ赤血球のアミノ酸配列についての復習を行った。そして、「今日は、遺伝情報を基に、どのようにタンパク質が合成され、アミノ酸配列が決定するのかを考えます」と、学習内容を提示した。

生物

授業構成や発問など、授業のすべてを CDの「主体性」を意識して行う

本時の 概要

【対象／教科／科目】1年生／理科／生物基礎 【分野・単元】遺伝子とその働き（全8時間のうちの7時間目）
【育成を目指す資質・能力】知識、技能、思考力、主体性 【学習内容】アミノ酸配列の決定の仕方を学んだ前時の授業を踏まえ、遺伝情報を基にタンパク質がどのように合成されるのかを、個人ワークとペアワークを交えながらワークシートに沿って学んだ。

科目の担当者間で共通事項を検討

理科では、新学習指導要領と「7つの北高力」、理科共通のルーブリックに基づいて各科目のシラバスを作成しており、それが科目の到達目標を共有する役割を果たしています。
「生物基礎」は、3人の教師で担当しており、3人で共通としているのは、授業進度と評価方法、定期考査の問題、各単元で行う実験の内容です。授業で使用するプリントやICTの活用を含めた授業の進め方、活動の内容などは、各教師に委ねられています。
年度初めに、どこまで指導方法をそろえるべきか、3人で話し合いました。その結果、学習目標と学習評価の方法が同じであれば、個人の裁量で授業づくりをした方が、私たちも授業を楽しめるのではないかという考えに至りました。
例えば、本時で使用したワークシートは



1学年主任
森谷一雅
もりや・かずまさ
教職歴15年。同校に赴任して10年目。理科（生物）。

私独自のものですが、プリントやレポートの記述内容をどの程度、評価対象とするのかは、科目内で統一しています。また、定期考査の問題は、今年度から科目内で統一しました。以前は、同じ科目でも、教師ごとに作問していたので、定期考査の統一は、指導改善の大きな一歩になったと捉えています。

CDを踏まえて主体性の涵養を意識

シラバスで学習の到達目標を共有したことで、私自身の授業への向かい方が変わりました。まず、定期考査の出題範囲が決まっているため、担当教師間で都度話し合い、授業進度をしっかり管理する意識が高まりました。
GDを踏まえて授業づくりを行う意識も定着してきました。特に、GDに掲げられた「自ら学び、自ら考え、自ら創り出す」ことや「主体的に物事に取り組む」ことを意識し、生徒が主体となって活動する時間を増やし

主 主体的な学び
対 対話的な学び
深 深い学び

科目のシラバス、単元の指導計画は、VIEWnext ONLINE に掲載。「TOP → 学校教育情報誌『VIEW next』 → 高校版バックナンバー」または、下記2次元コードからご覧ください。



私の 授業改善の展望

科目内で、育成を目指す資質・能力を共有したことで、科目の担当者同士で話し合う機会が増えました。授業はここまで進んだか、この単元では発展的な問題を扱うのか、進度が遅れた場合はどこを割愛したらよいといった情報交換を活発に行っています。情報交換を通して得た、先生方の科目に対する考え方や指導のノウハウを、自分の授業改善にも生かしていきたいと思っています。また、3観点の評価方法については、試行段階のため、改善が必要です。ICTの活用も課題です。千葉県では今年度、各教室の通信環境が整備されました。現在は、プロジェクターを使ってスクリーンにスライドを映す程度ですが、今後は、端末を使って生徒同士が意見を共有することなどを通じて、異なる視点を得たり、視野を広げたりといった、より深い学びにつながるような授業にしていこうと考えています。

本時のキー課題

12:28 mRNA とタンパク質の アミノ酸配列を考える



発展問題として、ある DNA の塩基配列に対する mRNA とタンパク質のアミノ酸配列について、個人で考えてから、グループで話し合った。「ここまでできていたのだから、この課題も全員できるはずだよ！」と、森谷先生は声をかけた。

12:13 アミノ酸と tRNA の 組み合わせを考える



森谷先生は、タンパク質が作られる「翻訳」の過程を説明。生徒は、それを基に、アミノ酸と tRNA の組み合わせをワークシートに記入し、周りの生徒と確認した。森谷先生から指名された数人の生徒が組み合わせを発表し、全体で答えを確認した。

対話によって「深い学び」に誘う

本時では、ペアやグループでの話し合いを通じて、自ら間違いに気づいた生徒が多かったです。自分はどこで間違えたのか、何を誤

っています。例えば、本時で、DNA の塩基配列が mRNA の塩基配列に転写される仕組みを説明する際、以前は、「A に対して U になるよ」などと、生徒が間違いやすい部分を先に説明していました。今は、個人ワークで mRNA の塩基配列を書かせ、それをペアやグループで確認する方法に変えました。教科書の構成も、学習意欲の向上を意識した各単元に関するエッセーがあるため、そこで取り上げられたテーマについて考察してから学習を進めるといった授業展開を意識しています。それによって、以前よりも生徒の学習内容への関心が高まり、授業に前向きに取り組んでいるように感じます。

解説の場面でも、質問形式の発話を意図的に挟んでいます。「ここから何が分かりますか」「どんなことが言えますか」と問いかけ、個人で考えさせてから、ペアやグループでそれを確認するといった活動です。そうした場面を少しでも多く盛り込むことで、「7つの北高力」の思考力や協働力、自己改善力などの向上につながればと思っています。今後の課題は、主体性の評価です。現在は、挙手の回数や解答の質などを評価の対象にしています。それによって生徒が活発に発言するようになり、積極性を引き出す面で効果を感じていますが、主体性を測る方法としては留意が必要であることは理解しており、よりよい評価手法を模索しています。

授業力の向上を目指し、活動の目的の明確化と、ICTの活用を推進

① 理念・ビジョンの共有が進んだ結果、ルーブリックに示されている評価規準は妥当なものか、授業はシラバスに記載されている学習の到達目標の達成に資するものになっているかといった観点で情報交換をする光景が、どの教科でも日常的に見られるようになったと、勝田幸裕校長は言う。

「新学習指導要領の実施前に作成したシラバスに血を通わせるために、先生方は、日々生徒と向き合い、担当者間で情報を共有しながら微調整を繰り返しています。今年度は始まったばかりで、手探

りしながら進めています。作成したもの縛られ過ぎずに、走りながら日々工夫し、授業や学習評価の精度を高めていってほしいと思っています」

現在でも、シラバスを用いて各科目で足並みをそろえ、組織的な授業改善を行っているが、さらに強化したい授業実践上の共通の指針として、勝田校長は次の2つを挙げる。

1つは、授業内で行う活動の目的の明確化だ。例えば、ペアワークの目的は、情報の共有か、解決の確認か、あるいは意見の集約な

のかといったことだ。その活動が授業で果たす役割は何か、対話の時間やワークシートの文字数は、目的に合っているか、何事も目的を明確にし、それを生徒と教師が共有することが、「深い学び」に到達するためには必要だと、勝田校長は強調する。

「生徒がペアワークをしさえすれば、『対話的な学び』になるわけではありません。大切なのは、活動によって生徒の内面がどう変わるかです。どのような活動や発問が生徒の変化を促したのか、生徒の振り返りや自己評価、教師による行動観察などを基に、生徒一人ひとりをしっかり見取り、授業改善のPDCAサイクルを回していく方法を模索しています」

もう1つは、ICTの活用だ。

「7つの北高力」の育成を重視すると、生徒主体の活動が必要になることから、その時間を捻出するための授業の効率化が求められる。そこで、ICTを活用して、板書の内容をスライドで投影したり、生徒の考えは端末に入力させ、瞬時に集約したりしている。

今後、各教科でICTの活用レポートを作成し、校内で共有する予定だ。また、ICTのみならず、指導の手法を収集・分析し、教師間で共有する仕組み作りも検討しているという。

④ 授業改善の状況は、7・12月に行う「主体的・対話的で深い学びに係る生徒の自己評価アンケート」で検証する予定だ。生徒が各科目で、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」ができていくかを自己評価し、その結果を集約して、できている授業と場面を明らかにする。その授業の内容を学校全体で共有したり、授業を撮影した動画を見て、よかった点を述べ合う校内研修を行ったりすることで、組織的に授業力を底上げしていきたいと、学校改善プロジェクトチームの和泉雄介先生は語る。

「生徒の声に向き合うことで、学校全体で新学習指導要領の理念が実現できているかを検証するとともに、改めて先生方が、『主体的・対話的で深い学び』についての理解を深め、授業改善を力強く推進していくことを期待しています」



進路指導主事、
学校改善プロジェクトチーム
和泉雄介
いずみ・ゆうすけ
教職歴14年。同校に赴任して9年目。外国語科(英語)。



校長
勝田幸裕
かつた・ゆきひろ
教職歴38年。同校に赴任して2年目。

学校概要

設立 1975 (昭和50) 年
形態 全日制/普通科/共学
生徒数 13学年320人、2学年280人
2022年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、鳥取大、秋田県立大、東京都立大、都留文科大に4人が合格。私立大は、学習院大、國學院大、駒澤大、昭和女子大、成城大、専修大、中央大、東洋大、日本大、法政大、武蔵大などに延べ486人が合格。

2

静岡県立 静岡東高校

「総合的な探究の時間」の不断の改善が、 教科の授業改善にもつながる

静岡県立静岡東高校では、グランドデザイン（以下、GD）の策定と並行して、「総合的な探究の時間」（以下、「総合探究」）で、資質・能力を育成する授業づくりと、観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）の方法を模索してきた。その成果は今、教科での授業改善と学習評価に生かされている。

※学校概要、教師のプロフィールは、P.18に掲載。



同校の新教育課程及びその編成に向けた取り組みは、本誌4月号・特集P.12～15をご覧ください。

全校体制での「総合探究」の推進によって、 新学習指導要領が示す授業観・評価観が浸透

静岡県立静岡東高校は、2019年度から「東陵セミナー（総合探究）」で行っている「SDGs探究学習」を軸に、同校が生徒に身につけさせたい「7つの資質・能力」（*）を教師間で共有し、授業改善を図ってきた。鈴木伸彦校長は、「総合探究」の成果を次のように語る。

『総合探究』^①では、担任・副担任が授業を担当し、観点別評価の3つの観点（以下、3観点）や『7つの資質・能力』を踏まえて作成

したルーブリックを基に学習評価を行ってきました。そうした実践を経て、教科指導においても、探究の手法を取り入れた授業改善が行われるようになりました（P.14～17に『総合探究』の授業実践と、探究の手法を取り入れた『化学』の授業実践を掲載）

「7つの資質・能力」を参考にしながら、「自己目標シート」を作成する教師も増えている。このシートは、自校の学校経営計画書に基づき、教師が自身の授業目標

を立て、学期ごとに実践のプロセスと結果を振り返るというもので、静岡県では県立学校の全教職員が作成している。

また、21年度末に、新教育課程^②に合わせて各教科でシラバスを作成し、科目ごとに、学習目標やおおよその授業展開について話し合った。そのおかげで、教科内で授業実践上の共通の指針を持って4月を迎えることができた。

授業づくりにおいて各教師の裁量に任される点は、科目や単元などによって異なる。例えば、化学では、学年統一で行う実験を決めつつも、各教師の得意分野を生かした実験を行ってもよいこととし

た。ただし、独自に行う実験は、クラス間での公平性を担保するため、学習評価の対象からは外した。今後は、一連の授業改善の効果検証を行い、PDCAサイクルを回すための科目ごとのシラバスの作成に取り組みたいと、鈴木校長は語る。

『総合探究』におけるルーブリックの組織的な運用は、『7つの資質・能力』の育成に向けて皆が歩調を合わせるための取り組みでもあります。そうした探究発の授業改善の取り組みが、教科指導における『主体的・対話的で深い学び』の視点からの授業改善につながることを期待しています

① 目標・ビジョンの共有 ② 授業実践上の共通の指針 ③ 各教師の創意工夫 ④ 成果検証の仕組み

* 課題設定解決能力・論理的思考力・自己実現力・自己管理能力・発信力・自己肯定力・社会参画力の7つ。

本時のキー課題

14:20 探究課題を決めるための議論



前時に続き、3チームに分かれて議論。ディハーン先生の助言を受けたチームは、前時に探究課題を「子どもの貧困」と決め、本時は具体的な対象や方法について考えることにしていた。「何について知りたい?」という先生の問いかけに、生徒は考え込んでいた。

14:15 ファシリテーターの紹介、本時の概要の説明



ファシリテーターのディハーン先生と、初めて授業に参加する学生2人が自己紹介した後、湯川先生が、本時の目標は探究課題の決定であることを伝え、議論の進め方を説明。「5W2H(*)を明確にして、探究課題をより具体化しましょう」と助言した。

総合的な探究の時間

学年会で授業の進め方を共有しつつ、課題を抽出し、授業改善に生かす



探究活動推進課主任
湯川 淑子
ゆかわ・としこ
教職歴29年。同校に赴任して5年目。英語科。

本時の概要

【対象／教科／科目】2年生／総合的な探究の時間 【分野・単元】探究課題の決定(全4時間のうちの4時間目) 【育成を目指す資質・能力】論理的思考力、協働力 【学習内容】静岡県立大学国際関係学部の方ヨナサン・ディハーン准教授と学生2人がファシリテーターとして各チームに入り、探究課題について議論。その後、各チームのリーダーが、本時の議論の過程と決定した探究課題を発表した。なお、英語チームでは、進行は英語で行われた。

授業案やワークシートを共有

「総合探究」は、2019年度の1年生からSDGsをテーマとして取り組み、3年間かけて先生方の協力で全校体制を実現しました。今年度の2学年では、SDGsの17の目標別に結成した57チーム、台湾の高校生との交流会があり、英語で発表する3チーム、静岡県立大学の学生と一緒に探究する7チームの計67チームが、8つの教室に分かれて活動しています。先生方の希望に合わせて、各教室に2人ずつの担当者が入り、各教室で生徒の活動を支援しています。

授業は、探究活動推進課が作成する授業案を基に、統一したワークシートを使用して

おり、先生方全員が、授業の進め方や生徒の活動内容、生徒への指示が分かるようにしています。先生方の中には、専門性や教科の性質、ご自身の経験と結びつけて、生徒に問いの立て方の具体的な手法や、フィードバック先、推薦図書などのアドバイスをしている方もいます。

徒に問いの立て方の具体的な手法や、フィードバック先、推薦図書などのアドバイスをしていく方もいます。

口頭でも説明し、丁寧に共通理解を図る

授業案を共有する場も設けています。21年度までは、時間割の中に、隔週で副担任会を組み込み、そこで次時の授業案を共有していました。今年度は、時間割の変更に伴い、「総合探究」を行う日までに、授業案とワークシートを担当教師に配布し、オンラインでも見られるようにしています。そして、フィールドワークや研究発表など、共通理解を丁寧に図った方がよい活動がある場合には、学年会で説明しています。

昨年度に行っていた副担任会や学年会では、先生方から意見を吸い上げて、授業改善につながる場にもなっていました。例えば、「チーム内の議論が行き詰まりやすい」と

単元の指導計画は、VIEWnext ONLINEに掲載。
「TOP → 学校教育情報誌『VIEW next』 → 高校版バックナンバー」、または下記2次元コードからご覧ください。



私の 授業改善の展望

「総合探究」を3年間行い、生徒同士で対話をし、学校外の方の協力を得ながら、自分たちの問題解決に向かう活動が、生徒の思考力や表現力、行動力の育成につながっていると感じます。担当教科の英語の授業では、作文やスピーチなどの表現活動で、素材文のテーマと「総合探究」のテーマを関連させ、身近な具体例や根拠を挙げながら、自分の意見を説得力を持って述べる生徒が増えてきました。生徒が「総合探究」で身につけた資質・能力を高められるよう、教科の授業でも、生徒主体の活動を増やしたいという思いがあります。授業を通して未知の世界を知り、確かな知識を基に広い視野で物事を捉え、想像力を働かせ、思考力を高める方法を模索しています。手探りながらも、「総合探究」で培ってきた指導ノウハウを、いかに教科指導に生かしていくか、各教科の先生方と引き続き考えていきたいと思っています。

14:58 探究課題の決定と 全体発表



生徒は、意見を5W2Hで整理。ディハーン先生の助言を受けたチームは、探究課題を「日本における貧困の仕組み」に改めた。各チームのリーダーが、議論の過程と決定した探究課題を発表。最後に、ディハーン先生が本時の生徒の活動を総括した。

14:28 探究課題を決める ための議論



ディハーン先生は、「どこに焦点をあてる？日本？世界？」「誰に話を聞きたい？」と、貧困にも、学校や家庭、地域、食糧など、様々な視点があることを説明した。生徒の考えが徐々に整理されていき、「日用品が買えない子ども」など、具体的な言葉が出てきた。

いった先生方の声を受けて、今年度は、初期指導の中で対話のルールを共有し、チームビルディングを行いました。

「総合探究」の学習評価は、学年統一のルーブリックに基づいた生徒の自己評価を材料としています。11月の中間発表の後に中間評価を、年度末には総合評価を行います。それらを踏まえた教師の評価を指導要録や調査書に反映する仕組みが整いつつあり、それらは、先生方にとって担当教科の観点別評価の参考になるのではないかと思います。

外部の異なる視点が生徒を深い学びに誘う

「総合探究」は、「主体的・対話的で深い学び」を実現しやすいと感じています。本時では、生徒がこれまで授業で学んだ知識や調べた情報を基に、未来への想像を膨らませながら、当事者意識を持って意見を出し合い、自分たちが取り組むべき課題を絞

り込んでいく過程が、まさに「主体的・対話的で深い学び」となっていました。

「深い学び」の実現には、大学やNPO、自治体といった学校外の方々の協力が欠かせないことが、「総合探究」の実践を通じて見えてきました。特に21年度に始めた静岡県立大学との連携事業では、大学教員や学生から外部の視点と専門的な視点での助言を受けることで、社会とのつながりをイメージしやすくなり、課題設定の質がより高くなっていました。

私が授業で大切にしているのは、学びを通じて、未知の世界を知り、自分がどのような人になりたいのか、どんな生き方をしたいのかを、生徒が思い描くようになることです。「総合探究」での気づきや学びが、将来の生き方や目指すべき社会像を考えるきっかけになるよう、これからも生徒や先生方と一緒に授業のあり方を模索していきます。

本時のキー課題

12:03

基にしたヒントが異なる
生徒たちが実験計画を検討主
対
深

基にしたヒントが異なる生徒が集まってグループを組み、各自の案を共有して次時に行う実験計画を検討した。「まず、どんな実験をするか、確認しよう」「分担の仕方考えないと」などと、生徒は話し合いの手順から決めていた。

11:45

同じヒントを基にした
生徒同士で議論主
対

山梨先生が本時の目標を説明し、「失敗しても大丈夫。その都度改善策を見いだす思考力が重要」と伝えた。生徒は事前に、a～dのヒントのいずれかを基に実験計画を立案。同じヒントを基にした生徒同士で集まり、各自の案を共有して議論した。

図 a～dのヒント

a	しょうゆの成分、しょうゆの製造工程
b	物質の分離の方法／ろ過、蒸留、分留、昇華、再結晶、抽出、クロマトグラフィー
c	元素の検出方法／Cの検出(石灰水白濁)、Hの検出、炎色反応、AgClの沈殿
d	イオン結晶の成り立ち、性質、水への溶解度

各ヒントは、授業1週間前に端末で配信。事前課題であるプリントも1週間前に配布した。
※学校資料を基に編集部で作成。

育みたい生徒像や実験の内容を共有
理科では2021年度末、授業を通じて育みたい生徒像について話し合い、「学んだ知識を基に、日常生活にかかわる科学の内容について疑問を持つ」「疑問に思った内容を調べたり、実験したりして、法則を導き出す」などと決めました。それらを踏まえて授業づくりを行うとともに、実験レポートや週末課題、定期考査の内容などを統一し、学習評価の方法もそろえました。

主体性も測る定期考査
本単元の学習評価は、生徒が作成する実験レポートと、期末考査の問題で行います。定期考査では、実験に関する会話文形式の問題を出し、実験に意欲的に取り組んだか、実験を通じてどのような資質・能力が身についたかを見ます。その結果は、教科内で共有し、生徒への発問や声かけ、授業展開が適切だったかを検証します。

また、本単元では、理科で初めて、「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」についてのルーブリックを作成し、生徒に自己評価させました。その方法で生徒の資

化学

探究のプロセスを踏まえ、
生徒が情報収集を行い、実験計画を立案

本時の概要

【対象／教科／科目】 1年生／理科／化学基礎
【分野・単元】 科学と人間生活・物質の構成（全19時間のうちの17時間目）
【育成を目指す資質・能力】 思考力、判断力、主体性、協働性
【学習内容】 生徒は事前課題として、しょうゆに塩化ナトリウムが含まれることを証明する実験の計画を、教師が提示したa～dのヒント（図）のいずれかを基に立案。本時では、知識構成型ジグソー法（*）を用いて、グループごとに実験計画を立てた。



1学年担任
山梨達也
やまなし・たつや
教職歴9年。同校に赴任して2年目。理科（化学）。

主 主体的な学び
対 対話的な学び
深 深い学び

1 目標・ビジョンの共有 2 授業実践上の共通の指針 3 各教師の創意工夫 4 成果検証の仕組み

* ジグソーパズルを解くように、協力して全体像を浮かび上がらせる協調学習法の1つ。ある課題について、複数の視点で書かれた資料を読む「エキスパート活動」、そこで得た知識を交換し、考えを深めていく「ジグソー活動」、全体でグループの意見を交換する「クロストーク活動」の3つの活動から成る。

単元の指導計画は、VIEWnext ONLINEに掲載。
「TOP → 学校教育情報誌『VIEW next』 → 高校版バックナンバー」、または下記2次元コードからご覧ください。



私の 授業改善の展望

理科の授業でも、探究的な学びを増やしたいと考えています。ただ、その実現のためには、探究的な学びの土台となる基礎知識や、実験の技能を、生徒にしっかりと身につけさせることが必要です。本単元も、生徒が実験器具や試薬に関する知識を十分身につけてから行うことが理想だったと、改善のための振り返りをしています。

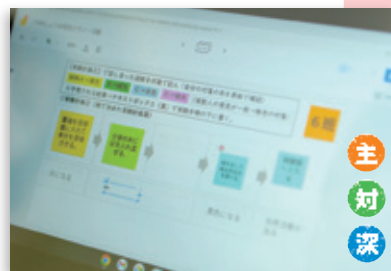
今後は、授業進度を速め、1年生の間にはできるだけ基礎実験を行いたいと考えています。そこで、ICTを活用し、私が板書をする時間を減らすなど、効率よく授業を進めることで、時間を捻出していきます。それは、理科全体の課題でもあります。情報やノウハウを教科内でしっかりと共有し、足並みをそろえて授業改善をしていきたいと思っています。

12:23 実験計画をまとめる



授業の終盤、山梨先生が、「ほかのグループの実験計画も参考にしよう」と声をかけると、生徒は端末でほかのグループの計画を確認した。最後に、グループで決めた実験手順と使用器具、試薬、予想結果をワークシートに記入した。

12:05 実験計画の検討過程はリアルタイムで全体に共有



「しょうゆを揮発させる?」「冷やすのはどうかな」と、生徒はこれまでに学んだ知識を基に意見を出し合い、実験の手法を模索した。その過程は、デジタルホワイトボード Jamboard でクラス全体にリアルタイムで共有した。(©Google)

質・能力の成長を見取ることができれば、ルーブリックを教科内で共有する予定です。

主体性を引き出すため、ワークシートを工夫

本時では、基にしたヒントが異なる生徒が集まったグループで実験計画の立案に取り組む方法にしたことにより、生徒は責任感と緊張感を持って、主体的に授業に臨んでいました。事前課題として実験計画を立案させたことで、授業前から各自が自分の考えを持てたことも、活発な対話につながっていました。

本時の実験では、1学期の授業で学習したすべてのことが必要とされました。単元を貫く課題に取り組む中で、知識を相互に関連づけたり、統合したりして、「深い学び」に至ったのではないかと考えています。

授業づくりでは、「総合探究」での指導の経験が生まれました。事前課題として取り組ませたワークシートに、所与のヒント以外に必要な

だと思う情報を調べて記入する欄を設けました。その発想は、探究の「課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」のサイクルから得ています。同欄への記入状況からも、主体性を測ることができると考えました。

本時の実験は、しょうゆから塩を取り出す段階と、取り出したものが塩だと証明する段階があり、段階を分けて課題を提示すれば、生徒は実験計画を立てやすかったと思います。しかし、ゴールが見えないワクワク感を大切にしようと、あえて段階を分けて課題を示しました。本時と同じ授業を先に行ったクラスの生徒からは、「分からないながらも、みんなで知恵を出し合い、それを整理していくうちに、深く考えられた」といった肯定的な声が多く聞かれました。そうした生徒の声や、前述のワークシートの工夫などからも、「総合探究」がカリキュラム・マネジメントの軸になっていることを実感しています。

「総合探究」の成果を生かした教科の授業を共有し、着実に授業改善を続ける

「総合探究」で培ってきた「主体的・対話的で深い学び」の視点

からの授業改善の工夫を、教科の授業に応用する教師が、山梨先生を始めとして現れつつある。そうした授業実践の共有が、自身の授業改善への刺激になっていると、国語科の田中律水先生は語る。

「新設科目の『現代の国語』でも、探究的な学びが求められており、授業づくりを模索しています。山梨先生の授業を見て、課題の設定やワークシートの工夫などから、探究の考え方や手法を教科指導にどう応用すればよいかがイメージできました。そして、それを教科

内で共有すれば、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善が進むと思いました」

「総合探究」が学校改革の軸となったのは、絶えず教師間で指導を振り返り、課題を検討して、改善を図ってきたからだ。例えば、21年度までは年度末のみだった、

「総合探究」で得た気づきや身についた力を振り返る生徒の自己評価を、22年度からは年2回にした。その背景には、「生徒が短い間隔で自分の成長を実感できる方がよいのではないか」「教師が生徒の変容をこまめに見取り、学習評価をしてはどうか」など、指導にあ

たった教師からの意見があった。

外部連携において、連携先とのコミュニケーションをしっかりと取ることが、生徒の「主体的・対話的で深い学び」を促すと分かってきた。本時で行った探究課題の設定では、湯川先生がデイハーン先生に事前に授業案を送り、各チームのこれまでの議論の過程を伝えた。そして、メンバーの意見を集約し切れていないチームのファシリテーションを依頼した。

「ファシリテーションを依頼したチームが掲げた探究課題は『子どもの貧困』で、まだ漠然としたものでした。本時で、デイハーン先生が『何を知りたいですか』『何が課題だと感じていますか』などと問いかけつつ、豊富な知見を生かして貧困を考える視点を例示すると、生徒は考えを掘り下げ、何に関心があるのか、具体的な言葉にして出すようになりました。事前に生徒の状況を共有していたからこそ、デイハーン先生は、生徒に必要な問いかけや視点を提示してくれたのだと思います」（湯川先生）
現在、同校では、未来構想委員

会を立ち上げてスクール・ポリシーの策定を進めており、その過程で学校のあり方や存在意義に関する議論を深めようとしている。

「GDで示す資質・能力は、学校の働きかけを通して個々の生徒に習得させたい力で、言い換えれば、あくまで個人の目標と言えます。一方、未来構想委員会で検討しているのは、本校がどのような学校を目指すのか、何のために存在しているのかといった学校の存在意義です。少子化は今後も一層進み、中学生が厳しい目で進学先を選ぶ売り手市場は、ますます加速します。スクール・アイデンティティや学校の特色を明確にし、地域に発信して浸透させることは必須だと考えています」（鈴木校長）
地域での同校のイメージは、「面倒見のよい学校」「国公立大学を目指す公立進学校」といったものだ。SPの策定をきっかけとして、教育内容を具体的にイメージし、活動の精選や力点をどこに置くかを校内で再考していく。「あれもこれも」ではなく、「あれかこれか」が重要だと捉えている。



探究活動推進課
田中律水
たなか・りみ
教職歴30年。同校に赴任して7年目。国語科。



校長
鈴木伸彦
すずき・のぶひこ
教職歴38年。同校に赴任して2年目。

学校概要

設立 1963（昭和38）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年280人
2022年度入試合格実績（現役のみ） 国公立大は、東京工業大、一橋大、横浜国立大、静岡大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大、九州大などに130人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ624人が合格。

3

広島県立
かなべあさひ
神辺旭高校

マスターブルーリックスを礎に、
生徒の主体的な学びを支援する

広島県立神辺旭高校は、新教育課程の編成と並行して、教育活動全体を通して育成を目指す5つの資質・能力を設定し、それぞれの資質・能力の到達レベルを4段階で示すマスタールーブリックを作成。自校が育成を目指す資質・能力について、教師間で共通認識を図り、組織的な授業改善を進めている。

※学校概要、教師のプロフィールは、P.24に掲載。



同校の新教育課程及び
その編成に向けた取り組
みは、本誌4月号・特集
P.16～19をご覧ください。

育成を目指す資質・能力を共有し、生徒の実態把握と授業観察を推進

広島県立神辺旭高校では、全教師^①による議論を経て作成したマスタールーブリック(図)を活用して、育成を目指す資質・能力について^②の共通認識を図りながら、授業改善を進めている。同校の学校経営計画では、ICTを活用して^③基礎的・基本的な学力を確実に身につけ、自分から進んで課題について他者と対話し、考えを深めることができる授業の実践を行動目標としている。そのため、教師たちはICTを活用し、生徒が協働

的に問題解決に取り組む機会・時間を確保する工夫をしている。

③ 各教科・各教師で授業改善を進めるため、そして、取り組みの成果を検証するために、同校が年間を通じて推進しているのが、教科を超えた相互授業観察だ。相互授業観察は、授業者となる教師が、他の教師に観察してもらいたい授業上の工夫などを授業観察票で明示した上で実施される。ICTの活用、グループワーク、教科横断型の授業のあり方などを考える

授業改善に向けたアイデアは、機会になっっている。

相互授業観察以上に、その後の教師間での対話によって多く得られていると、上村純先生の『英語コミュニケーション』(授業実践はP.22参照)の授業を見学した西村由先生は説明する。

「上村先生の授業では、他者との協働を通して主体性の育成を図ろうとしていて感じました。私は、自分の授業に対する課題感を打ち明け、上村先生と授業改善に向けたアイデアを出し合いました。そうした教師間のコミュニケーションが、授業改善の推進力になっっていると感じます」

マスタールブリック

	知識		能力	
	基本知識	応用知識	基本能力	応用能力
① 知識・技能	基礎的、基本的な知識の習得が求められる。習得した知識を活用し、応用する能力を育成することが求められる。	基礎的、基本的な知識を習得し、応用することとしている。	知識事項を習得事項と関連して理解しようとしている。	知識事項を習得事項と関連して理解し、それ以外の知識や技能を活用しようとしている。
② 移動的課題解決力	知識の友人と事象と、自分の得意な方法で問題を捉え、その問題と類似し、解決を模索していく力	知識の中で、ルールに従って、思考することによって問題を解くことができる。	知識の中で、自分の役割を把握し、考えられたことに取り組むことができる。	知識の中で、自分の役割を把握し、考えられたことに取り組む。問題への支援を必要とすることもできる。
③ 思考力・判断力	物事を批判的に複数の観点から見て、課題解決に必要な手段や方法を考えることができる。	与えられた課題を解決するための方法を考えあえることができる。	与えられた課題を解決するための方法を考え立てて考えることができる。	与えられた課題を解決するための方法を考え立てて考える。他の物事の方策も考えあえることにつながる。

※学校資料をそのまま掲載。

- ① 目標・ビジョンの共有 ② 授業実践上の共通の指針 ③ 各教師の創意工夫 ④ 成果検証の仕組み

14:35 本時を貫く問いを生徒自身が設定



地震の震源と火山が記された世界地図を見て気づいたことを生かして、「なぜ」で始まる問い（本時のメインクエスチョン）を、生徒一人ひとりが自由に設定。その問いの解決を目指して授業が再開した。問いとその答えは、授業中に生徒間で共有された。

14:25 パフォーマンス課題を再確認



授業の冒頭では、本単元で取り組むパフォーマンス課題「任意の都市で住宅購入や賃貸契約をする場合、地形・気候・環境問題を考慮すると、どのような保険に加入するのがよいか」を改めて確認した。その上で、前時の学習内容の振り返りを行った。

地理

パフォーマンス課題や本時の問いを通して、生徒が互いに考えを深め合う

● 本時の概要

【対象／教科／科目】2年生／地理／地理B 【分野・単元】第1章 自然環境 第1節 地形（全10時間のうちの3時間目） 【育成を目指す資質・能力】思考力、判断力、表現力、主体性 【学習内容】前時では、日本の地形と災害について学習し、地震・火山の分布に関して、生徒一人ひとりが問いを立てた。本時では、プレートについて学習し、前時の問いの答えをまとめ、地震・火山を考慮した保険プランを考えるパフォーマンス課題に取り組んだ。



3学年担任
前田智子
またた・ともこ
教職歴4年。同校に赴任して4年目。地理歴史・公民科。

「何ができるようになるか」を生徒と見通す

担当する地理の授業では、単元の最初、その単元を学習することで何ができるようになることを目指すのか、単元のねらいと学習活動の見通しを説明し、生徒の主体的な学びを支援するようにしています。

① 単元のねらいを本校の生徒に合った言葉にしていく際、私が立ち返るようにしているのが、学習指導要領と本校のマスターループブックです。中でも、マスターループブックには、育成を目指す資質・能力を発揮した時の本校の生徒の姿が記述されていますので、マスターループブックを単元ごとに確認すれば、各単元のねらいとそれを達成するための授業計画が考えやすくなります。

マスターループブックを活用していなかった時は、私の説明を生徒が理解することをゴールとした授業計画を立てていたように思

います。しかし今は、「授業で育んだ力を用いた問題解決」をゴールとして授業計画を立てています。毎時の始まりに、その単元のパフォーマンス課題について言及するのも、何ができるようになるために学んでいるのかを生徒に意識してもらうためです。

本単元では、地形・気候問題・環境問題を学び、国内外の都市ごとに、マイホームの購入時や賃貸契約時に加入すべき保険プランを考えることをゴールに学習に取り組みしました。地形の学習終了時に保険プランを作成し、その後の気候問題、環境問題の学習終了時に、それまでに考えたプランを修正することから、単元を通して課題に向き合うこととなります。

他教科の教師と協働して授業を改善

本時は、相互授業観察として他教科の先生方が見学にきました。相互授業観察後の先生

● 主体的な学び
● 対話的な学び
● 深い学び

単元の指導計画は、VIEWnext ONLINEに掲載。
「TOP → 学校教育情報誌『VIEW next』 → 高校版バックナンバー」、または下記2次元コードからご覧ください。



私の授業改善の展望

パフォーマンス課題は、授業で身につけた力を使って取り組む課題として生徒に提示しますが、何かで調べればすぐに答えにたどり着ける課題になってしまっていることがあります。授業に集中し、じっくりと考えたくなるパフォーマンス課題を追究していきたいと思っています。

パフォーマンス課題が、生徒にとって自分事として捉えることができ、没頭して取り組みたくなるものであれば、地理の授業だけでなく、「総合的な探究の時間」や他教科の知識も生かして考察したいと、生徒は思っています。私自身も、他教科の内容を学ぶことはもちろん、REASAS(*)などの多様なツールの活用の可能性を模索しながら、広い視野で授業改善を図っていきたくと思っています。

本時のキー課題

15:00 パフォーマンス課題における自分の考えを入力



本時の最後に、本単元のパフォーマンス課題である、自分が選んだ都市で加入すべき保険プランを考えた。その際、本時で学んだ「プレート」「境界」という語句を使って、地震や火山の影響を踏まえたプラン選択の根拠を説明することを生徒に求めた。

14:50 教師の解説をヒントに、自分の問いに取り組む



震源と火山の関連について前田先生が解説。生徒は、それをヒントに、各自が設定した問いの答えを考えた。本時は、相互授業観察の対象授業であり、授業案が周知されていたため、生徒たちがキー課題に取り組む直前に、見学する教師が集まってきた。

方からのフィードバックは、授業改善につながる重要な視点を与えてくれます。例えば、授業の導入で、パフォーマンス課題の成果物の例をタブレットに配信し、具体的なイメージを持たせるようにしたのは、「言葉だけで説明するよりも、どんなものをつくるのか、形を見せた方が授業の見通しが立てやすくなる」という助言がきっかけです。

実は、マスタールーブリックができた当初、私は、単元のねらいを設定する際も、学習指導要領ばかりをよりどころにしがちでした。もちろん、それでも単元のねらいは設定できるのですが、次第に2つをつなげて、自校が育成を目指す資質・能力を踏まえた授業計画が立てられるようになると、相互授業観察などでの他教科の先生との対話がスムーズになりました。

互いの考えを磨き上げる授業を

本校では、教科会の時間が毎週必ず設定されています。その時間に、パフォーマンス課題や、毎回の授業で生徒が考える「メインクエスチョン」の立てさせ方について、同じ教科の同僚から意見をもらいます。

生徒間でのメインクエスチョンやパフォーマンス課題の成果物の共有は、生徒にとっても多様な他者との対話的な学びの時間です。私も毎授業でそうした時間を確保しています。ただ、単に考えを生徒同士で披露し合うだけではなく、互いに批判し、学びを深める経験が重要です。資質・能力の伸張には他者の存在が関与していることを、生徒が自覚できる授業を、これからも追究していきたいと思っています。

* 地方創生の取り組みを情報面から支援するために、経済産業省と内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局が提供する、地域経済分析システム。人口動態や産業構造、人の流れなどの官民ビッグデータを集約し、可視化する。<https://resas.go.jp/>

10:50 動詞を見つけ、ペアで確認



生徒はまず、ワークシートに記載されている英文を読み、動詞を探した。品詞や意味が分からない単語については、辞書を使って確認した。その後、ペアで答え合わせをし、答えが異なった箇所については話し合い、合意できる答えを2人で導き出した。

10:30 本時の活動とその目的を説明



上村先生は、本時の冒頭で、「長文読解が苦手という高校生は少なくない。今日の授業では、動詞と主語に着目しながら、チャックごとに内容を理解し、長文を読む力を高めていこう」と、本時の活動の内容と、その目的を生徒に説明した。

英語

教科団で生徒の実態をつぶさに把握し、土台となる共通の授業計画を作成

本時の概要

【対象／教科／科目】1年生／英語／英語コミュニケーション1 【分野・単元】CREATIVE English Communication I - Lesson4 "What Do You Eat for Lunch?" (全3時間のうちの1時間目) 【育成を目指す資質・能力】知識・技能 思考力・判断力 【学習内容】各文の中の動詞と主語を見つける活動を通じて、チャック(*)ごとに内容を理解すること、長文が読みやすくなることを生徒に気づかせた。

各科目で共通の授業計画を立案

英語科では、教科で育成を目指す資質・能力を踏まえ、科目ごとに単元の授業計画を立案するオーガナイザーを設定し、オーガナイザーが提案する授業計画案を参考に、各教師はそれぞれ授業を行っています。私は、「英語コミュニケーション」のオーガナイザーを務めています。一つひとつの授業の進め方については、各先生にお任せしています。例えば、前の単元では、共通のパフォーマンス課題の実施と共通のプリントの使用だけは決めていましたが、授業中にタブレットを活用するかなどは教師によって異なりました。本単元では、次のような経緯があり、リーディング・リスニングに特化した指導を行うことにしました。

英語科では、1学期の中間考査後の6月に、それまでの授業での生徒の様子と、パフォー



1学年担任
上村 純
うえむら・じゅん
教職歴8年。同校に赴任して4年目。英語科。

マンス課題や定期考査の結果を、週1回開催される教科会などで共有し、今後の授業のあり方について話し合いました。その結果、「英語が分かるようになってきている」といった実感を生徒にもっと味わわせるため、苦手意識を持っている長文読解に焦点をあてた指導が必要だという認識で一致しました。一方で、本校に入学したばかりであるにもかかわらず、ペアワークに積極的に取り組んでいるといったよい面も、多くの先生が挙げていました。私は、そうした1年生の現状を踏まえて、本単元のオーガナイザーとして、協働的な学びを取り入れたリーディング・リスニングの授業計画を立案することにしたのです。

生徒の状況を踏まえて、単元目標を設定

本校の生徒は、単語を覚えることは得意ですが、長文読解になると、「どのように読んでいけばよいのか分からない」といった声が多

- ① 目標・ビジョンの共有 ② 授業実践上の共通の指針 ③ 各教師の創意工夫 ④ 成果検証の仕組み

*複数の単語で構成された、意味のある短文の英語表現

- 主 主体的な学び
対 対話的な学び
深 深い学び

単元の指導計画は、
VIEWnext ONLINE に掲載。
「TOP → 学校教育情報誌
『VIEW next』→ 高校版バック
ナンバー」、または下記2次元
コードからご覧ください。



私の 授業改善の展望

私は、本校のカリマネプロジェクト会議推進リーダーとして、カリキュラム・マネジメントに関する校内研修会の企画・運営を担当しています。これまでの研修会では、「授業のタイムマネジメントが甘く、教科書をこなすことを優先してしまった」といった率直な反省が聞かれました。英語科も、育成を目指す資質・能力は意識しても、その育成の到達状況を検証する仕組みづくりには、まだまだ進化の余地が残されていると思っています。

今後は、PDCAサイクルの中でも、C・Aにあたる部分の充実が求められているのですが、マスターループリックを、各教科を超えた共通言語とすることで、資質・能力の育成につながる授業改善を組織的に進めることができるのではないかと期待しています。

11:05 学習内容を振り返り、さらに問題に取り組む



動詞と主語を見つけてチャンクごとに内容を把握する本時の活動の意味を、上村先生が改めて説明した。その後、生徒は、上村先生が提示した日本語と意味が同じ英語表現を、教科書に記載されている文章の中から、指定された語数で探した。

「対話的な学び」を、そして、英語によるコミュニケーションにおける見方や考え方を働かせることで「深い学び」を実現させたいと考えました。本時は、相互授業観察の対象でしたので、他教科の先生方も見学に来ました。ある先生から「1人で長文に向き合えるようになるという、中期的な学びの見通しを持つことの大切さを、授業の冒頭で生徒に具体的に説明してもらったと思う」と、助言をもらいました。

本単元では、内容理解から読み方の理解へと指導の重点を変えたわけですが、単元ごとにマスターループリックを基に生徒が自身の学びを振り返り、そこから生徒の状態を教科団で把握しているからこその変更です。

生徒のできていないところを把握しながら授業や定期考査をつくることで、生徒が「できるようになった」と実感できる場面をもっと増やしていきたいと思っています。

本時のキー課題

11:00 動詞、主語を確認し、チャンクの内容を理解



上村先生は、動詞を見つけることで主語が見つけやすくなることを生徒に説明。そこで、次は主語を探させた。その後、主語が正しく見つけられているかをペアで確認し、チャンクごとに内容を把握させた。

く上がります。そのような生徒は、1単語ずつ意味や内容を理解しながら長文を読もうとしているのではないかと仮説を立てました。そこで、本単元では、長文はチャンクごとに内容を理解すればよいこと、1つの文を読む際には、動詞に着目すると主語が把握しやすいことを、本校の生徒が得意なペアワークを繰り返す中で、生徒に実感させようと考えました。学習内容を自分の課題として捉えさせることで「主体的な学び」を、身につけた知識をペアで活用させることで「対話的な学び」を、そして、英語によるコミュニケーションにおける見方や考え方を働かせることで「深い学び」を実現させたいと考えました。

「できる」が実感できる授業を

実は、教科団で本単元の授業計画案を共有した際には、「1学期最後の単元なので、夏季休業中、教師の手から離れて1人になっても英文に向き合えるよう、読解力の土台を固めさせたい」と先生方に話していました。そうしたことは生徒にも伝えるべきなのだという気づきを、本時を相互授業観察の対象にしていたおかげで得ることができました。

育てたい生徒像を踏まえて、 生徒の内に次の問いを生む授業を

①④
マスターループブリックを通じた

育成を目指す資質・能力の共有と、相互授業観察を始めるという教科を超えた教師間のコミュニケーションによって、組織的な授業改善に取り組んでいる神辺旭高校。同校の相互授業観察には、普段授業を担当しない管理職も積極的に足を運び、意見を述べる。20年ほど前に同校の教壇に立ち、今年度から教頭として赴任した内田仁教頭は、育てたい生徒像の変化を念頭に、これからの授業のあり方を提言する。

「教師を信頼し、日々の授業や家庭学習の課題に真剣に取り組む



教頭
内田 仁
うちだ・ひとし
教職歴32年。同校に赴任して1年目。



校長
三浦喜成
みうら・よししげ
教職歴29年。同校に赴任して1年目。

本校の生徒の気質は今も変わりま

せん。ただ、これからの社会では、与えられた役割を率先してこなすだけでなく、取り組むべきことを主体的に見つけていく力が必要です。相互授業観察でも、自主性と主体性の違いに留意することで、グループワークの進め方や家庭学習の課題のあり方の検討、深い学びへと生徒を誘う本質的な問いを生み出すための授業準備などについて、踏み込んだ議論ができるのではないかと思います」

22年度は、マスターループブリックを基にした各教科・科目の単元ループブリックの作成と並行して、



教育情報部主任
西村 由
にしむら・ゆう
教職歴21年。同校に赴任して5年目。理科。



主幹教諭
小野塚慎一郎
おのづか・しんいちろう
教職歴21年。同校に赴任して1年目。地理歴史・公民科。

マスターループブリックそのものの改訂も行っていると、主幹教諭の小野塚慎一郎先生は説明する。

④
「7月までに、マスターループ

ブリックに関する研修会を2回開催し、マスターループブリックに基づいた授業実践の手応えや課題感を共有しました。本校では、今年度から総単位数を31単位に減らしていますが、主体的な活動にもっと取り組めるよう、生徒に時間を返すことで生まれる生徒間の学びの違いをどこまで許容するのか、それはループブリックではどのように記述されるべきかといったことが話題になり、生徒の実態を注視しながら、ループブリックの改善を続けていくことになりました」

22年度に同校に赴任した、三浦喜成校長は、「主体的・対話的で

学校概要

設立 1980（昭和55）年
形態 全日制／普通科・体育科／共学
生徒数 1学年240人
2022年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、北海道大、島根大、山口大、香川大、愛媛大、福山市立大、尾道市立大などに28人が合格。私立大は、明治大、京都産業大、同志社大、龍谷大、関西大、近畿大、関西学院大などに延べ274人が合格。

深い学び」を授業で実現するために、今後はさらに、「生徒の変化を予測し、促す授業」を学校全体で追究していきたいと、展望を語る。

「新学習指導要領の実施を機に、本校は総単位数を減らし、生徒に学びを委ねる指導へと転換を図っています。事実、授業を見ると、先生方はICTを効果的に活用し、教え過ぎないように気をつけるとともに、その日の授業の目標を丁寧に伝え、授業の最後には、成果や課題を振り返らせるなど、新しい授業スタイルへと変わります。生徒を深い学びへと導いています。地理の相互授業観察では、前田先生の説明を聞く生徒から、『だったら、これはどうなるのだろう？』などと、目の前の授業の『次』にあたる内容を自ら問うような言葉が聞こえてきました。そのような、生徒から生まれる問いを察知して、生徒に次の問いを与える授業が、本校の時間割を埋め尽くせば、生徒たちは常に知的な問いを持って、楽しく頭を回転させ続ける3年間を送ることができるとだと思います」

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に 充実させることで、「主体的・対話的で深い学び」を実現

2021年1月、中央教育審議会による『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）にて、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が示された。その2つの学びは、新学習指導要領に明記され、学校現場に浸透してきた「主体的・対話的で深い学び」と、どのような関係にあるのか。そして、どのように実現すればよいのか。中央教育審議会の教育課程部会の委員を務めた上智大学総合人間科学部の奈須正裕教授に聞いた。

学びの質を高める学習形態
として示された2つの学び

「主体的・対話的で深い学び」は、資質・能力の育成にあたり、目指すべき「学びの質」を表現するために示されました。それは、知識を覚えるだけの浅い学びではなく、知識を活用したり、つなげたりする深い学びであり、教科本来の面白さを感じることと学びを自



上智大学 総合人間科学部教育学科 教授
奈須 正裕
なす・まさひろ

専門は教育方法学、教育心理学、カリキュラム論。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会、総則・評価特別部会などで、新学習指導要領の策定にかかわる。『個別最適な学びと協働的な学び』（東洋館出版社）など、著書多数。

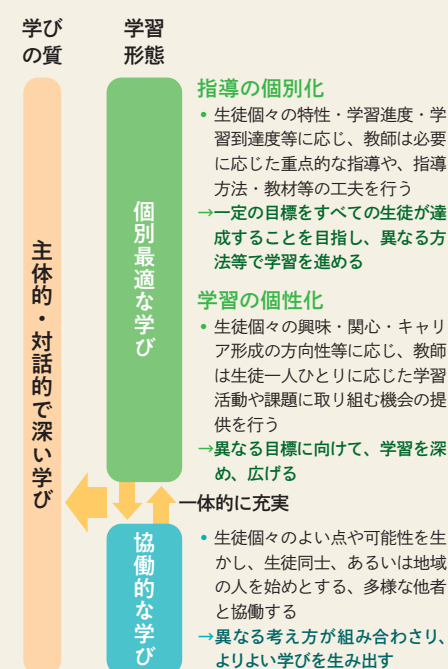
分事化し、仲間や教師、そして教科書等に取り上げられる先哲など
と対話をしながら深めていく学び
を指します。そうした学びの質を
実現するための「学習形態」とし
て示されたのが、「個別最適な学
び」と「協働的な学び」です（図1）。

その2つの学習形態を行いやす
くしようと、児童生徒1人につき
1台の端末を配備するGIGAス
クール構想が実施されました。自

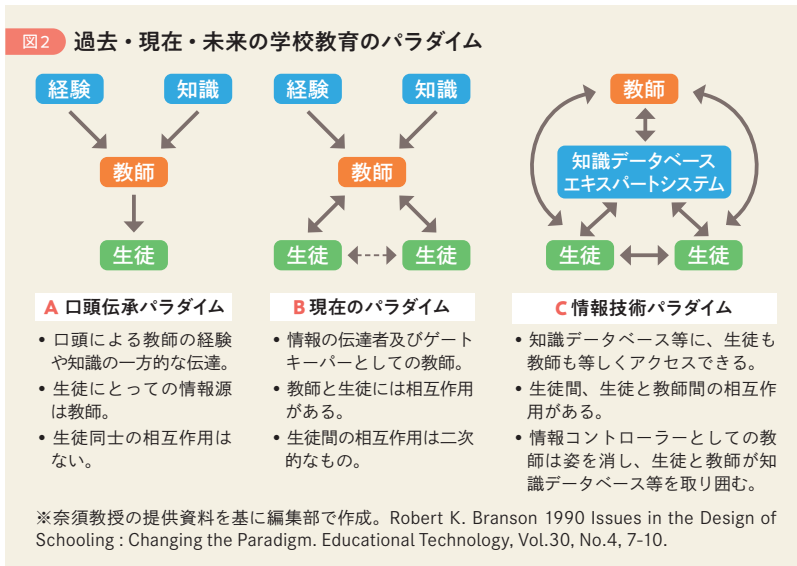
由に知識にアクセスすることがで
きる環境の下、児童生徒が自分
が学ばべきことを考え、必要な知識
を自ら獲得し、自分で考えを深め
ていく。それが、今求められてい
る「個別最適な学び」です。その

学びは、自立的で個性的な学び手
である生徒が相互に問いかけた
り、助け合ったりする「協働的な
学び」によって一層深まります。
「個別最適な学び」を深めてい
き、自分なりの考えが固まってく

図1 「主体的・対話的で深い学び」と
「個別最適な学び」「協働的な学び」



※中央教育審議会『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）と、奈須教授への取材を基に編集部で作成。



ると、生徒は、同様に学びを深めている仲間の考えを聞きたくになります。その段階で「協働的な学び」を設定すれば、自身の考えとのすり合わせの中で生じた感想や疑問を率直に伝え合う、極めて互恵性の高い学びが生じるでしょう。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を繰り返し、一体的に充

教師の役割は、学習環境の整備と、思考のサポート

実させることで、生徒は自分の得意な学び方や関心、適性や進路を見いだし、「主体的・対話的で深い学び」を実現させていくのです。

「個別最適な学び」「協働的な学び」の実現に際して

参考になるのは、アメリカの学者ロバート・ブランソンが提唱した「過去・現在・未来の学校教育のパラダイム」です。かつては、教師が一方的に知識を教えてきました(図2A)。それが、教師と生徒や生徒同士の対話・協働が行われる現在の姿になりましたが(図2B)、教師を紹介して知識が生徒に伝達される流れのままです。これからは、生徒が知識に自由に

アクセスすることができるよう環境をつくり、生徒は自分の意思とペースで学び、他者と対話しながら問いを深められるようなあり方が求められます(図2C)。そのような発想の転換(パラダイムシフト)が重要です。

そうした授業で教師がすべきことは、学習環境の整備や、生徒が持つ知識を概念化したり、構造化したりする思考のサポートです。教師が教えなければ生徒は学ばないという人もいますが、それは違います。人間は、適切な環境があれば、自ら問いを持ち、学びを深めていくことができます。

具体的な授業の方法の1つとして、「単元内自由進度学習」を紹介します。単元の目標と学習内容、授業時数、教材とその使い方を伝えることで、生徒が見通しを持って、自分の好きな方法とペースで学べるようになります。学習が早く終わった生徒は発展問題に取り組み、理解が不十分な生徒は教師が支援する。それは、教育の平等・公正の保証にもつながります。ただ、そうした授業は準備が大

変です。まずは年間数回の実施でよいと思います。少ない回数でも継続して実施すれば、生徒の学びの意識は大きく変わるでしょう。

教師が各自の持ち味を発揮し、授業の質を向上させる

授業づくりでは、教科内で学習目標や育成を目指す資質・能力を共有した上で、「個別最適な学び」と「協働的な学び」をどのように行うのか、実施する単元や授業時数、授業の進め方、教材などについて話し合うことが大切です。

単元ごとに、授業展開や教材、ルーブリックも含めた授業案を作成するのもよいでしょう。同じ教科でも専門領域が異なる教師がいるのが、高校の特徴です。それぞれの持ち味を発揮しながら授業案を作る過程は、互いの指導力を高めることにつながり、ベテラン教師から若手教師に指導ノウハウを伝える機会にもなります。教師による「個別最適で、協働的な学び」が実現すれば、授業の質もおのずと高まるのではないのでしょうか。

For School Section

学校改革や組織運営に役立つ
事例や情報を、
先生方の思いを乗せてお届けする

P.28

指導変革の軌跡

その時、教師は何を考え、どう動いたか。
学校改革の過程を当事者の言葉で追う

お勧めの分掌▶

管理職

教務担当

進路担当

埼玉県・私立春日部共栄中学高校

考查・授業時程・学期制の改革

中間考查を廃止して単元テストを導入することで、
生徒が授業や学習に集中して取り組める環境をつくる

P.32

— 疑問や課題を解決！実践につながる！ —

新課程レポート

ベネッセ教育情報センター

現場が直面する課題や疑問の解決に
つながる事例や解説記事を提供

お勧めの分掌▶

管理職

教務担当

広島県立安芸府中高校

生徒とともに深める観点別評価

育成を目指す資質・能力を明確に掲げ、
生徒、教師が互いの活動を磨き続ける

P.36



学年団を訪ねて

学年経営に悩む先生方に！
チームづくりの秘訣を掘り下げる

お勧めの分掌▶

学年団

担任

北海道・私立札幌第一高校 2021年度3学年団

躍進を続ける中でも課題を直視し、
自律的学習者の育成に向けて指導を再構築

P.40



学校危機管理 基礎講座

お勧めの分掌▶

管理職

いざという時の対応は平時の準備で決まる。学校危機管理の専門家が解説

学校管理下での事故

埼玉県・私立春日部共栄中学校高校

考查・授業時程・学期制の改革

中間考查を廃止して単元テストを導入することで、生徒が授業や学習に集中して取り組める環境をつくる



学校概要

- ◎設立 1980 (昭和55) 年
- ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 1 学年約 550 人
- ◎2022 年度入試合格実績 (現役のみ) 国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、埼玉大、千葉大、東京工業大、横浜国立大、東京都立大などに 91 人が合格。私立大は、青山学院大、学習院大、慶應義塾大、上智大、中央大、東京理科大、明治大、法政大、早稲田大などに延べ 1,004 人が合格。

変革の背景

「^あ敢えて三兎を追う」からこそ、
学習に集中できる環境を整備したい

埼玉県・私立春日部共栄中学高校は、「敢えて三兎を追え」を教育方針に掲げ、勉強、学校行事、部活動のいずれにも全力で取り組み、生徒に推奨している。多くの生徒が大学進学を目指しつつ、部活動にも励み、水泳部や吹奏楽部など、全国大会の常連となっている部活動も多い。

しかし、生徒が学習に集中できる環境を十分整えられていないことを課題視していたと、教務部長の吉場慎二先生は語る。

「年5回の定期考查の合間に慌ただしく学校行事が入り、生徒は学習に集中しづらい状況でした。教育方針と異なり、部活動中心の生活を送る生徒も、少なくありませんでした」
学習評価は、定期考查に比重を置いていたため、定期考查の直前のみ勉強をして、成績を維持する生徒もいた。生徒からは、「なぜ、日頃の課題や提出物にきちんと取り組まず、定期考查で点が取れていることで成績を維持しているような生徒が、指定校型の学校推薦型選抜の受験者に選ばれるのか」といった声が上がることもあった。定期考查の結果だけでなく、日頃からの学習の積み重ねを評価する仕組みをつくる必要があった。

また、大学入試で頻出する事項を「重要問

題」として授業中に取り組ませ、その問題を定期考查に出題することを、定期考查の出題方針としていた時期があった。大学入試で頻出の事項を授業や定期考查で扱うことで、大学入試で求められる学力を確実に定着させるというねらいがあったが、成績中・下位層を中心に、「丸暗記すれば、定期考查では点が取れる」と、重要問題の解答をただ覚えるだけのような学習をしてしまう生徒が散見されていた。重要問題は必ずしも学力の伸長には寄与していないと、吉場先生は感じていた。

「生徒の声をきっかけに、定期考查重視の学習評価や定期考查の出題方針が、生徒の学習姿勢によい影響を与えていないと気づきました。学校の課題を抽出する際には、生徒の

声に耳を傾け、生徒の姿をしっかりと捉えることが大切だと思いました」

変革の一手

生徒も教師も授業に集中できるよう、 中間考査を廃止し、単元テストを導入

2019年度の初め、吉場先生は、教務部長や進路指導部長、教科主任などから成る「カリキュラム委員会」で、1学期の中間考査の廃止を提案した。併せて、中間考査の代わりに単元テストを実施し、短いスパンで学習内容の定着度を確認する機会を設けることと、定期考査の比重が高い評価を、平常点（課題の提出状況、単元テスト、授業に取り組む姿勢）5割、期末考査5割の割合での評価に改めること、さらに、定期考査での重要問題の扱いを抜本的に見直すことも提案した。

「1学期の授業は、実質的に4月中旬に始まり、4月下旬から5月上旬には大型連休があるため、十分な授業時数を確保できないまま5月下旬の中間考査を迎えていました。5月は、6月上旬に行われる文化祭の準備があり、文化祭が終わると期末考査の時期になります。そうした慌ただしさを是正し、生徒も教師も落ち着いて授業に取り組み、単元テス

トで学習の定着度を測り、その単元テストや授業態度などを評価する仕組みにしようと説明しました。カリキュラム委員会のメンバーは、私の提案の意図を理解するだけでなく、『2学期の中間考査も廃止にしてはどうか』といった提案もしてくれました」（吉場先生）
カリキュラム委員会での議論を踏まえ、1・2学期の中間考査の廃止と単元テストの導入を、各教科会に諮った。当時、国語科教科主任だった中村麻衣先生は、国語科内で上がった懸念点を一つひとつ解消していったと語る。

「授業中に単元テストを行うと、生徒の活動や教師の解説の時間が減ってしまうのではないかと、進度の違いでクラスによってテストの実施日が異なると、問題が流出してしまうのではないかとといった声が上がりました。そうした懸念点は、カリキュラム委員会で検討し、最終的には、単元テストは15分間程度で到達度が測れる問題にすること、単元テストを受けるにあたっての注意事項（図1）を教務部が作成して生徒に配布することとし、中間考査の廃止に至りました」

授業にゆとりが生まれ、 活動時間の確保や進度の調整が容易に

そうして全教科会の合意を得て、20年度か

図1 生徒に配布した単元テストの注意事項（抜粋）

- ①問題を他者に流出させる行為や、机の中にあるプリント等を見ながら解答することは禁止です。
問題を流出させることは、正しい評価ができないことにつながります。皆さんの点数に応じて、先生は授業スピードやレベル、内容を調整していますので、本来の学力に合った授業をするのが難しくなってしまいます。
- ②問題を他者に流出させた場合や、机の中にあるプリント等を見ながら受験するといった不正行為は、定期考査時のカンニング行為と同等の扱いをします。
当該のテストは0点、場合によっては他の教科の単元テストも0点になります。単元テストは評価に大きくかわるので、評定はもちろんのこと、学校推薦型選抜等にも影響します。
- ③単元テストの受験環境を整えて受験しましょう。
原則は定期考査時と受験上のルールは同じです（違うのは、机の中に荷物が入っているかどうかのみです）。～以下略～

※学校資料を基に編集部で作成。

ら中間考査を廃止し、単元テストを導入した。単元テストは原則、単元終了時に授業の時間内で行うこととし、実施の頻度や解答時間など、実施方法の大枠を各教科内ですり合わせた上で、詳細は教師個々に任せることにした。教師によっては、単元テストを生徒に予告せずに実施することで、生徒が常に学習する意識を持つようになり、単元テスト以外にも小テストをこまめに行い、学習状況を丁

寧に見取り、指導に反映したりしている。

定期考査実施の間隔が空き、ゆとりを持って授業ができるようになったことで、授業に思考力や判断力、表現力などを育む活動を取り入れやすくなったと、英語科教科主任の岡舞衣子先生は指摘する。

「読んだ英文を自分の言葉にして話すリテリングや、クラスメートが書いた英文文を読み合う活動に、多くの時間を充てることができるようになりました。素材文が社会性の高いテーマの時は、素材文の内容理解に加えて、そのテーマについて生徒同士で議論する時間も設けるようにしています」

進路指導部長の伊藤恒先生は、生徒主体の授業がよりしやすくなったと語る。

「以前は、次の定期考査の出題範囲を、試験前までに終わらせなければならぬといったプレッシャーがありました。しかし今は、生徒の理解度に応じて学習内容を変える余裕ができ、生徒本位で授業進度を調整することができるようになりました」

単元テストや課題の提出状況、授業に取り組む姿勢も評価の対象にしたことで、日頃の授業や学習を大切にする生徒も増えている。

「単元テストを抜き打ちで実施することが定着して以来、定期考査直前に知識を詰め込むのではなく、授業があったその日のうちに復習をする習慣が、生徒に少しずつ定着して

いるのを感じます」（岡先生）

数学科教科主任の小篠拓史先生は、課題の提出状況が学習評価の対象になったことから、自分の理解度に応じて、自ら問題を選んで取り組んだノートを、任意で提出させる課題を出している。提出されたノートの内容を、観点別学習状況の評価の3つの観点でそれぞれ3段階で評価。さらに、評価の内容を生徒にフィードバックしており、任意の課題でありながら、相当数の生徒が提出しているという。

「生徒は、私のフィードバックを見て、自分の学習状況や学習方法が適切であるかを確認しています。学習状況や学習方法を自己分析し、自分が取り組むべき問題を選択して、自分で力をつけていく生徒が増えています」

完全週5日制、45分授業、2期制の導入で、学びの質をさらに深める

今年度は、完全週5日制、45分授業、2期制の導入に踏み切った。

完全週5日制としたのは、生徒の学習時間と、部活動及び休養の時間を確保するためであり、教師の働き方改革の一環でもある。そして、それまで行っていた土曜の授業時間分を平日に割り振って、1日7コマとしても終業時刻が遅くならないよう、1コマの授業時

教務部長

吉場慎二 よしば・しんじ

教職歴21年。同校に赴任して20年目。入試担当委員。情報科。

進路指導部長

伊藤 恒 いとう・ひさし

教職歴30年。同校に赴任して30年目。数学科。

教務部

中村麻衣 なかむら・まい

教職歴7年。同校に赴任して8年目。国語科。

数学科教科主任

小篠拓史 おぎさ・ひろ

教職歴7年。同校に赴任して7年目。数学科。

英語科教科主任

岡 舞衣子 おか・まいこ

教職歴6年。同校に赴任して7年目。英語科。



間を50分間から45分間に短縮。さらに、長期休業の日数を減らして、年間の授業時間数を確保することにした。

「数年前から45分授業は試行していました。50分授業よりも最後まで集中力を保てる」と、教師にも生徒にも好評だったことから、45分授業に踏み切りました」（吉場先生）

3学期制は、2期制（前期4～9月、後期

図2 2019～22年度 年間計画の変遷

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
2019年度 まで	始業式 入学式	大型連休	中間考査 文化祭	期末考査		三者面談	体育祭 中間考査		期末考査		中学校・高校 入試の休業日	学年末考査
	1学期			夏季休業		2学期			冬季休業		3学期	春季休業
2020～ 21年度	始業式 入学式	大型連休	文化祭	期末考査		三者面談	体育祭 1学期の中間考査、2学期の中間考査を廃止。		期末考査		中学校・高校 入試の休業日	学年末考査
	1学期			夏季休業		2学期			冬季休業		3学期	春季休業
2022年度	始業式 入学式	大型連休	文化祭	前期定期考査 三者面談	校内統一試験 夏季休業		体育祭 三者面談を9月から7月に移動。夏季休業・冬季休業明けには、校内統一試験を実施。			中学校・高校 入試の休業日	校内統一試験	後期定期考査
	前期(夏季休業含む)					後期(冬季休業含む)						

学校行事は主要なものを掲載。赤字は、変更・追加した項目。

※学校資料を基に編集部で作成。

変革の成果・展望

生徒の学力を的確に把握し、
日々の指導に反映させる

完全週5日制、45分授業、2期制は始まっ

10(3月)に変えた。3学期制では、1学期が終わって夏季休業に入ると、生徒の意識が学習から離れがちになるという課題があった。そこで、これまで9月に実施していた三者面談を7月に移動し、休業明けには校内統一試験を実施して、夏季休業中の学習の成果を測ることにした。

「校内統一試験は、模擬試験のように、初見の問題や応用問題などを出題することとし、前期の成績の評価の対象にすると、生徒に伝えました。そして、三者面談で夏季休業中の学習計画について話す場を設け、生徒が自身の学習について、課題意識を持って夏季休業を過ごせるようにしました」(吉場先生)

冬季休業明けの1月末にも、校内統一試験を実施する計画だ。1月は、中学校入試や高校入試があり、休業日が多い。そこで、夏季休業と同様に、生徒が冬季休業中や1月の休業日に、しっかりと自学自習に取り組むようにするというねらいがある(図2)。

たばかりで、成果はこれから検証していく。ただ既に、生徒から、「自分が取り組みたい学習に取り組める時間を持てるようになった」といった肯定的な声が上がっており、同校は改革の手応えを感じている。

今後の展望について、伊藤先生は、「私個人としては、将来的に、中間考査だけでなく、定期考査自体をなくしてもよいのではないかと考えています」と語る。

「単元テストや小テストを実施することで、教師は生徒の学習の状況を日頃からの確に把握し、それを指導に生かせるようになりました。それは、一連の改革の大きな成果の1つです。また、生徒の学習の到達度は、単元テストや小テストで十分測ることができていると考えています」(伊藤先生)

同校では、新たな取り組みを行う際、大切に行っていることがある。

「やってみてうまくいかなければ、すぐに改善するか、やめればよいのですから、先生方と十分に話し合い、学校にとってよいと思ったことは、まずは挑戦するようにしています。生徒が大きく成長するために、全力で三兎を追える環境の実現に向けて、これからも先生方との対話を重ね、挑戦を続けていきます」(吉場先生)

新学習指導要領がスタートした 2022 年度、学校現場には資質・能力を育成するための指導と評価を積み重ねながら、より自校に合った形へと軌道修正していくことが求められる。現場が直面する課題や疑問を解決し、よりよい計画・実践につながる情報を提供する。

— 疑問や課題を解決！実践につながる！ —

新課程レポート

ベネッセ教育情報センター

テーマ

生徒とともに深める観点別評価

実践レポート

2 学期以降の観点別評価と 教育活動の改善に向けて

2022 年度から実施の高校の新学習指導要領においても観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）の充実が求められているが、既に多くの学校で、主に定期検査を活用した観点別評価が実践されている。2 学

期を前にした今、生徒の学びの質の向上に寄与する評価のあり方を改めて考え、今後の評価をより自校の生徒に合った形に修正していくことが重要だ。また、評価を真に充実させるために、教育活動そのものの改善も欠かせない。そこで今号では、観点別評価の充実と授業改善に、学校一丸となって取り組む先進校の実践事例を紹介する。

育成を目指す資質・能力を明確に掲げ、 生徒、教師が互いの活動を磨き続ける

広島県立安芸府中高校

広島県では、22 年度からすべての県立高校で、学校として育成を目指す資質・能力を設定し、ルーブリックを使って育成の状況を評価している。広島県立安芸府中高校では、「6 つの力（図 1）」を設定し、それらをすべての教育活動とひもづけながら生徒に意識づけするとともに、観点別評価の充実も図っている。

日々の学びを、育成を目指す資質・能力につなげる

教育活動ごとのルーブリックを生徒と共有し、 教師、生徒が協働的に評価

22 年度 4 月より、学校として育成を目指す 6 つの力を設定し、それらを学校行事などを含むすべて

の教育活動とひもづけている広島県立安芸府中高校。生徒は、6 つの力のルーブリックに基づいて教

育活動に取り組むことで、「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」を発揮すること、何ができるようになるかを具体的に理解することができ、活動の目標が立てやすくなるというメリットがある。22 年度の同校では、多くの教師が授業の中で、6

設立 1980 (昭和 55) 年
形態 全日制／普通科・国際科／共学
生徒数 1 学年約 200 人

2022 年度入試合格実績（現役のみ）

国公立大は、広島大、県立広島大、広島市立大、北九州市立大などに 18 人が合格。私立大は、明治大、京都産業大、立命館大、関西外国語大などに延べ 272 人が合格。

図1 生徒が作成した、
育成を目指す6つの力のシンボルマーク



地域社会・国際社会の持続的な平和と発展に貢献できるグローバルリーダーとなるため、特に生徒に求められる6つの力を設定した。
※学校資料をそのまま掲載。

「何度も会議を重ねて策定した6つの力を4月から様々な場面で周知したところ、美術選択の生徒有志がシンボルマークを作成した(図1)、放送部が学校紹介ビデオに入れたり、生徒たちも6つの力を大切な目標だと認識しています。将来、卒業生が同窓会などで集まった時に、6つの力を基

に高校生活を振り返ってもらうことが私たちの夢です」(高橋校長) 6つの力は、教科学習における観点別評価、特に「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の評価の深化にもつながっている。同校での観点別評価を牽引しているのは、英語科だ。広島県立高校で唯一の国際科を設置する同校には、英語科が中心となってパフォーマンス評価の研究に取り組んできた実績がある。英語科では、「主体的に学習に

取り組む態度」の評価において様々な工夫を行っている。例えば、授業の予習・復習や、単語テストに向けた学習状況を生徒が振り返り、テスト結果などとともにルーブリック(図2)を用いて自己評価し、それを教師による評価と比較させることで、生徒自身で学習の改善点を把握することができるようにしている。

「教師による評価と自己評価を比較させる際には、生徒の主体性を尊重しています。教師が示した学習の進め方を踏まえて、自分はどうな学習方法を選択したのか、その成果は納得いくものだったのか、学習を改善するとしたら、それはどこかを、自分の言葉で語らせます。そうした自己評価においても、育成を目指す6つの力が求められます。生徒の振り返りのうち、優れた内容については、オンラインプラットフォームでほかの生徒にも共有することで、自己評価する力を伸ばすようにしています」(英語科・頼近眞理先生) 教師が学び方のモデルを示した

図2 「主体的に学習に取り組む態度」のルーブリック(一部)

評価	十分に満足できる 5	概ね満足できる 3	努力を要する 1
ペアワーク、グループワークなど協働的な活動	相手に聞わず、一言して積極的に相手をサポートし、関わり、耳を傾け、対応することができる。率先して働きかけ、仲間と協議して、タスクを滞りなくこなすことができる。	積極的にペア相手と関わり、耳を傾け、対応することができる。仲間と協議して、タスクを滞りなくこなすことができる。	仲間との交流が少なく、タスクが上で支障がある。ペアやグループのメンバーに迷惑をかけることがある。
授業の予習・復習	予習や復習を欠かさず行うことに加え、集中して授業の内容をより効果的に学ぼうとしている。	予習や復習をほぼ毎回行い、集中して授業の内容を効果的に学ぼうとしている。	予習や復習を行わないことがある。
授業への主体的な参加	指名しなくても自ら自分なりの考えを述べたり、意見質問するなど、主体的に授業に参加しようとしている。	指名されれば、自分の考えを述べることができる。指名されたことはできるが、主体的な授業への参加がより一層求められる。	授業中に注意が散漫になることがある。クラスメートに迷惑をかけることがあったり、授業中に他の作業したりすることがある。

※学校資料を抜粋して掲載。

上で、生徒が学び方を自分で選択することが重要であり、自分で選択したからこそ、自身の学びを分析することができる。これまで、ややもすると「結果」ばかりが評価の対象になりがちだったが、生徒の自己分析が深まったことで、結果に至る前の土台づくりにおける生徒の「変化」も評価の対象とするようになったと、同校の英語

「中間調査後、英語科で、生徒の変化を1学期後半はどう見取るかを話し合いました。その結果、家庭学習の取り組みの状況を題材に自分の学習行動を分析させ、その内容に注目していくことなど、今後の方針を共有しました」（国際科主任・加藤賢一先生）

「もちろん、6つの力をどのよう
に育成し、評価していくか、そ
の具体的な方法は教科によって異

生徒が学校生活で身につけた資質・能力を自己評価し
2学期以降の取り組みを三者懇談で保護者にプレゼン

と2学期以降の高校生活の過ごし方を、生徒から保護者と担任にブレゼンする。生徒のブレゼンを聞いた保護者と担任は、生徒に対してフィードバックを行い、2学期

「私の所属する国語科でも、6つの力を軸にした授業の目標の確認と、振り返りを行っています。生徒のメタ認知能力を高めるだけでなく、私たち教師にとっても『この生徒は、今日の授業でこんな気づきを得たのか』と、生徒を深く理解し、授業改善の気づきを得る機会になっています」(進路指導主事・柳楽和人先生)

[illegible]

以降のさらなる成長を促す考えた。
「三者懇談に先立って、生徒はあらかじめプレゼン準備シート（図3）の作成に取り組み、6つの力の中で特に身につけることができた力と、身につけられなかった力を選び、学校生活の過ごし方などとともに整理します。同時に、2学期以降、授業や学校行事にどのように取り組んでいきたいかを宣言します。三者懇談での生徒によるプレゼンは、21年度2学期に試行的に実施したのですが、普段、

家庭ではなかなか聞けない学校生活の様子を知ることができたと、保護者にもとても好評でした」(指導教諭・久山慎也先生)

さらに同校では、学期に1回程度予定する授業観察でも、6つの力がどのように育成されているかを、授業を見る視点の1つとして設定。生徒中心の授業で6つの力が育まれているかを、教師と生徒の発話時間の可視化などを通して検証し、2学期以降の授業改善につなげていく計画だ。



校長
高橋 真
たかはし・まこと
教職歴36年。同校に赴任して2年目。



教頭
大川 敬洋
おおかわ・たかひろ
教職歴29年。同校に赴任して2年目。



指導教諭・教育研究部主任
久山 慎也
ひさやま・しんや
教職歴26年。同校に赴任して1年目。英語科。



進路指導主事・進路支援部主任
柳楽 和人
なぐら・かずと
教職歴22年。同校に赴任して8年目。国語科。



国際科主任・外国語科主任
加藤 賢一
かとう・けんいち
教職歴20年。同校に赴任して2年目。英語科。



国際科1学年担任
頼近 真理
よりちか・まり
教職歴17年。同校に赴任して5年目。英語科。

今後の展望

教師は自身の授業スタイルを更新し、
学校は生徒が資質・能力を発揮する多様な場を設ける

高橋校長は、「振り返りをさらに充実させることで、生徒に、自分はずな学ぶのか、何のために学校にきているのかを、1コマ1コマの授業で成功体験を味わわせながら、考えさせたい」と語る。

「日々の振り返りは確かに大切ですが、それが単なる作業になって形骸化しないよう、注意が必要です。そのため、先生方が生徒の振り返りに目を通し、6つの力の育成につながる学びとして価値がある振り返りをクラス内で共有することが今後も欠かせません。振り返りを自己との対話にとどめず、クラスメートがどんな学びをしているのか、どのような展望を抱いているのかに気づかせることは、他者との対話のきっかけになるはず。また、先生方には、6つの力の育成の視点で自身の授業を振り返ることで、自分の授業

の癖を見抜き、新しい授業スタイルに転換するチャンスにしてほしいと思っています」（高橋校長）

加藤先生は、「6つの力はすでに評価できるものばかりではなく、かつ、発揮しながら身につけるものだからこそ、学校には、生徒が資質・能力を発揮する真正の学びの場が必要」と語る。

「本校は、『総合的な探究の時間』だけでなく、他の授業においてもプロジェクト学習に力を入れています。プロジェクト学習は、まさに6つの力を総合的に発揮する場です。様々なプロジェクト学習における学びの成果を地域、そして海外に発信し、交流する機会を増やすことで、生徒は、本校が育成を目指す6つの力が社会に出た時も確実に役立つものであると気づくはず」（加藤先生）

育成を目指す「6つの力」を通じて成長を見取り、
生徒に「なりたい自分」を描かせる広島県立安芸府中高校の取り組みを
VIEWnext ONLINE で詳しく紹介します

<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article11442/>



新課程に関する情報は、『ハイスクールオンライン』でお届けします！

・新教育課程の参考になる特設コーナー設置 ・過去のオンラインセミナーのアーカイブ動画・資料などを掲載！

— 疑問や課題を解決！実践につながる！ —

新課程レポート

ベネッセ教育情報センター

『ハイスクールオンライン』トップページ＞新課程からアクセス

https://bhso.benesse.ne.jp/hs_online/sidou/shinkatei/shidou/index.html



学年団を訪ねて

躍進を続ける中でも課題を直視し、 自律的学習者の育成に向けて指導を再構築

北海道・私立札幌第一高校 2021年度3学年団



学年団が直面した課題

◎大学入試の合格実績は大きく飛躍していたが、教師たちは、補習や課題、追試で生徒を引っ張り続ける指導に限界を感じていた。

◎社会環境や生徒の気質が変化する中、教育活動の礎となってきた学校独自の進路指導プログラムを、より今の生徒に合った形に更新する必要があった。

学校概要

校訓に「目は高く 足は大地に」を掲げる北海道屈指の進学校。学習と部活動や特別活動を通じて、「知・情・意・体」の調和の取れた、世界でリーダーシップを発揮できる人材の育成に努める。進路指導プログラム「進路コンパス」と学習指導プログラム「学習コンパス」、そして、社会課題を発見し、その解決策を導きながら、社会貢献できる力を身につける活動「探究コンパス」という独自の教育プログラム、さらに、北海道大学を始めとする全国の難関大学への進学を目標とした学力向上の取り組み「HUPプロジェクト」を展開する。



設立 1958(昭和33)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 1学年約400人

2022年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京大、京都大、神戸大、九州大、札幌医科大学などに219人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、東京理科大、早稲田大などに延べ607人が合格。

引っぱり上げる指導からの転換のため、 自校伝統の指導をブラッシュアップ

北海道・私立札幌第一高校は特に近年、国公立大学合格者を順調に増やし、直近の2022年度大学入試では、北海道大学47人を含む国公立大学合格者219人という過去最高の成果を上げた。だが、その輝かしい成果の裏側には、進学実績が躍進する中でも生徒の実態に向き合い、指導の改善に取り組む同校の教師たちの姿があったと、同校に26年間勤務する佐藤祐介先生は振り返る。

「本校は、伝統的に放課後の補習や家庭学習に力を入れることで、生徒を引っ張り上げる指導を行ってきました。私たちの指導についてきてくれる生徒の頑張りを誇りに思いながらも、生徒は疲弊しているように見え、このままでは進学実績はいつか頭打ちになるのではないかという不安もありました」

17年度に道内屈指の公立進学校から転任してきた平田稔夫先生も、同様の課題感を覚えたと振り返る。

「生徒たちが『学校から与えられた課題をとにかくこなしていきさえすれば、学力は向上する』と思っているのであれば、それはこれからの時代を生きる生徒のためにならない。指導の転換が必要だと考えました」

19年度の1学年団に担任の1人として参加した平田先生は、当時の1学年主任と、進路指導のブラッシュアップに着手した。

「学年主任は、『学校が大好きな生徒』を育てたいと常々語っていました。そのような学年主任でしたから、生徒は疲弊しているのではないかといった自分が持っている課題感を率直に打ち明け、生徒を一律に引っ張り上げる指導から、生徒が自ら計画を立て、自律的に学習していくことを促す指導への転換を提案した時も共感してくれました」（平田先生）

進路指導のブラッシュアップとして具体的に取り組んだのは、同校の進路指導プログラム「進路コンパス」を、より今の生徒の実態に合ったものにしていくことだった。進路コンパスは、職業・学問調べ、志望学部・学科・大学選択など、進路選択に関する3年間の学習を体系化したプログラムで、生徒は毎回、教師が用意したワークシートなどに取り組む。01年度に同プログラムが構築されて以来、同校の躍進を下支えしてきたが、近年の生徒を取り巻く環境の変化に伴い、修正が必要な点も見えてきたと、同校の卒業生でもある佐藤亮介先生は説明する。

「進路コンパスには、課題の提出状況や学習時間を記録させるなど、教師が生徒を引っ張り上げるための指導が多く盛り込まれてい



リーダーに聞く！ 5つのQ&A

- | | |
|--|---|
| <p>A</p> <p>どのようなチームを目指しましたか？</p> | <p>Q</p> <p>生徒のことにについてたくさん話しながら、同じ方向を目指していくチームです。</p> |
| <p>A</p> <p>リーダーとして心がけていることは？</p> | <p>Q</p> <p>先生方一人ひとりの顔を見ながら、「何か困り事を抱えていないだろうか」と想像することです。そうすると、会議の中で出てきた言葉や、保護者などとの電話対応の様子を見聞きした時に、「何かあったの？」と声をかけることができるからです。</p> |
| <p>A</p> <p>学年団としての「成功」は？</p> | <p>Q</p> <p>多くの生徒が、納得して新しい進路に前向きに踏み出すことです。そして、そのことに對する喜びを、学年団の先生方と共有することです。</p> |
| <p>A</p> <p>リーダーとして自覚する</p> | <p>Q</p> <p>長所は何ですか？</p> |
| <p>A</p> <p>相手が生徒であれ、同僚の先生方であれ、一緒に一生懸命やっていこうという思いをストレートに伝えられるところです。</p> | <p>Q</p> <p>リーダーとして自覚する</p> |
| <p>A</p> <p>短所は何ですか？</p> | <p>Q</p> <p>熟考しがちなため、新しいことを始める際に時間の余裕がなくなることがあります。先生方が余裕を持って取り組めるように、判断のスピードを上げたいです。</p> |

☒ 自律的な学習を促すワークシート

[illegible]

ました。今の生徒たちの実態を踏まえて、一人ひとりの生徒にどのように成長していくてほしいかを考えながら、進路コンパスをブラッシュアップしたいと思いました」

模擬試験を自律的な学習習慣の確立の契機とするため、進路コンパスのワークシートを改訂。教科ごとに進研模試の素点によるレベル別の学習アドバイスを伝えた上で、生徒自身に学習戦略を立案させ、担任との面談へとつなげた。※学校資料をそのまま掲載。

確かに、以前は生徒全員に対して、一律に一定量の学習を求めるべき時期もあったが、今は生徒たち一人ひとりに、何を、どのように学習していくべきなのかを考えさせることが、より重要だと平田先生は考えた。

「これからの時代を生きる上で求められるのは、目標に向けて自ら戦略を立て、それを実行する力です。そこで、生徒自身に学習計画を立てさせることを通じて、受験本番まで自分で戦略的に学習を進められる生徒を育てようと、学年団の先生方に提案しました」

学習にかかわるワークシートを、いつ、どれくらい勉強したかを記録させる形式から、自分で見極めた重点学習分野について、どのように学習するのかを具体的に考えさせる形式に改訂し、その記載を基に、担任は生徒と1年次から学習戦略について語り合った。また、模擬試験や定期考査の前後には、各教科の担当教師から、習熟度別などの観点で学習方法を生徒に例示することで、生徒が主体的に学習計画を立案することができるよう、支援を行った(図)。

希望進路への思いを、
自分の言葉で語らせる

は、生徒が志望校への思いを言葉にする機会
進路コンパスのブラッシュアップの過程で

を設けることを重視した。例えば、以前は「志望校に合格するためには、どれくらい成績を伸ばす必要があるか」を聞いていた進路コンパスのワークシートを、「どうしてその大学を志望しているのか」を丁寧聞く形に改訂した。自分の志望が偏差値だけに基づくものではなく、大学での学びや職業観、生き方とつながっているものであることを、自分の言葉で表現させたかったのだ。

「最初は、『この大学を目指すのは、偏差値が高いから』とだけ書く生徒もいました。そういう生徒には、私たち担任が個別に面談を行い、社会問題への関心などを言葉にさせていきました。そうすることで、生徒の第1志望は強固なものになるとともに、大学名ではなく、学問分野で志望校を考えるようになったため、第2、第3志望も定まりやすくなりました」（佐藤亮介先生）

進路コンパスの改訂にあたっては、資質・能力という観点も大切にした。

『将来、金融業界で働きたいから経済学部を志望』といったように、職業と大学・学部・学科をダイレクトにつなげるだけではなく、金融業界でどんな仕事をしたのか、そこではどんな資質・能力が求められるのか、そうした資質・能力は、高校や大学で、何を、どのように学ぶことで自分の中に育まれるのかを考えさせたいという思いで、進路コンパス



学年団を訪ねて



佐藤 祐介 さとう・ゆうすけ
現1学年主任・教務部
教職歴26年。同校に赴任して27年目。
地理歴史・公民科。



小川 佳那子 おがわ・かなこ
現1学年担任・入試広報部
教職歴11年。同校に赴任して5年目。
理科。



佐藤 亮介 さとう・りょうすけ
21年度3学年担任・進路指導部学年チーフ
現1学年担任
教職歴6年。同校に赴任して7年目。
英語科。



平田 稔夫 ひらた・としお
21年度3学年主任・担任
現進路指導部副部長
教職歴35年。同校に赴任して6年目。
理科。

を見直しました」（佐藤亮介先生）

学年団で育てたのは、 「学校が大好きな生徒」

学年団の担任たちは、自律的学習者の育成を目指し、生徒の言葉に耳を傾け、生徒を支えた。小川佳那子先生は、「生徒は教師と密にコミュニケーションを取れているから、安心して主体性を発揮できる」と語る。

「生徒がワークシートに進路目標やその実

現のための学習計画を書いたら、自分が高校

生の時に描いた進路志望やその実現のために

立てた戦略を生徒に伝えました。教師とのコ

ミュニケーションの中で、生徒は自ら掲げた

目標の達成のために自分は何をすべきかを主

体的に考えたから、教師に引っ張り上げられ

るのを待つのではなく、自ら学習に取り組む

ことができたのだと思います」

2年次の途中から学年主任を引き継いだ平

田先生は、時間の経過とともに、学年団の教

師たちがクラスを超えて生徒のことを語るよ

うになったと振り返る。

「生徒の自律的な学習を見守る中で、生徒

の中に発見した小さな変化や成長を、職員室

でいつも語り合っていました。進路コンパス

が、単なる記録や調査票ではなく、自律・自

走という視点から生徒を見取るツールになっ

たのです」（平田先生）

学年団の教師が生徒に寄り添い、生徒の主

体的なアクションを見守ったから、「学校が

大好きな生徒」を育てることができたと、平

田先生は語る。その結果が、22年度大学入試

でのさらなる躍進として実を結んだのだ。

「今年の2月、札幌は記録的な大雪に見舞

われましたが、多くの3年生が学校に足を運

びました。学校で仲間や先生と頑張れば、きつ

と受験はうまくいくという気持ちだったのだ

* 学年団 輝きのポイント *

- * 生徒を引っ張り上げる指導から、自律的学習者へと育てる指導に転換を図った
- * 進路指導プログラムの改訂にあたっては、生徒の実態を重視し、改訂後は、生徒と対話を重ねながら、主体性を引き出した

と思います」（平田先生）

生徒を引っ張り上げる指導から、生徒の自

走を促す支援へと変革を果たした学年団の指

導マインドは、学校全体へと引き継がれよう

としている。

「私は22年度の1学年主任を務めています

が、平田先生の学年団に所属した先生方がた

くさん1学年団にいて、とても心強いです。

ブラッシュアップされた進路コンパスを、平

田学年団の経験とともに受け継ぎ、さらに生

徒に合ったものへと、先生方と一緒に磨き上

げていきます」（佐藤祐介先生）

学校管理下での事故

解説者



日本女子大学
教職教育開発センター
教授 坂田 仰

大阪府の公立高校に勤務後、東京大学大学院法学政治学研究科公法専攻博士課程単位取得退学。1996年、日本女子大学に赴任。専門は、憲法学、公教育制度論。2021年9月に『新訂第4版 図解・表解教育法規』（共著、教育開発研究所）を出版。

学校で起こり得る危機に対し、どのような備えをしておくべきか。事故や災害などが発生したら、被害を最小限にとどめるためにどう対応すればよいのか。学校の危機管理について研究する坂田仰教授が解説する本コーナー。第9回は、学校管理下での事故について解説する。

負傷・疾病は年間約21万件
約6%の高校生が事故に遭う

学校管理下での事故を未然に防ぐために

- ✓ 「うちは大丈夫」と思わずに、他校や過去の事故事例を教訓として生かす。
- ✓ ヒヤリ・ハットを軽視せず、校内で共有して、教師・生徒に注意を促す。
- ✓ 事故時に速やかに使えるよう、AED（自動体外式除細動器）の使用訓練や点検を。
- ✓ 生徒の自主活動が増えた分、これまで以上に生徒が責任ある行動を取れるよう、安全教育を行う。

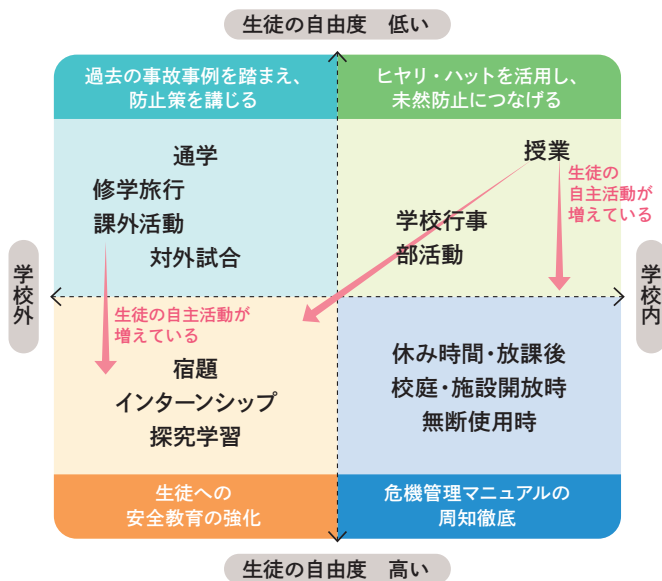
学校等の管理下における災害に対して災害共済給付を行う独立行政法人日本スポーツ振興センターによると、2021年度に全国の高校等（*1）で発生した負傷・疾病の数は、約21万件に上りました。コロナ禍以前は年間およそ26万件でしたので、発生件数は減少していますが、それでも、高校生の約6%が事故等に遭っていることになります（*2）。事故の状況を分析すると、負傷・疾病、障害が残る事故、死亡事故には、一定の傾向が見られます。

負傷・疾病が起こる場面は、「課外指導」が約6割で、その大半が「体育的部活動」に

よるものです。次いで、「各教科等」が3割弱で、教科別に見ると、ほとんどが「保健体育」です。障害が残る事故は、20年度が239件、21年度が192件あり、発生場面は、「体育的部活動」「保健体育」の順で多く、負傷・疾病と同様の傾向が見られました。つまり、体の接触が伴ったり、器具を使ったりする授業や部活動では、事故が起こりやすいのです。一方、死亡事故は、20年度が26件、21年度が14件あり、「体育的部活動」「保健体育」のほか、「休憩時間」や「通学中」でも多く発生しています。死因で最も多いのは、心臓系、中枢神経系・大血管系で、いわゆる突然死でした。元気に活動していた人の予期せぬ死が、高校生にも起こり得るのです。

*1 全日制・定時制・通信制の高等学校、高等専門学校及び高等専修学校。
*2 毎年公表される「災害共済給付状況」学校の管理下の災害」による。

図 学校管理下で起こる事故の防止策



※坂田教授の提供資料と取材を基に編集部で作成。

ヒヤリ・ハットを軽視せず、 基本的な事故防止策を徹底

これまでの事故を教訓として、様々な事故防止策が講じられています。多くの教育委員会が、熱中症対策や部活動事故防止のガイドラインを作成していますし、具体策では、日本高等学校野球連盟が、練習中の打撃投手用ヘッドギア・打者用ヘルメットの装着を義務づけています。重要なのは、「うちは大丈夫」と思い込まずに、指導者が防止策を順守し、

生徒への安全指導を徹底することです。

事故が起きたら、たとえケガをしていなくても、軽視してはいけません。21年6月号の本コーナーで、「1つの重大な事故の背後には、29の軽微な事故があり、さらにその背後には、300のヒヤリ・ハット（異常）が存在する」というハインリッヒの法則を紹介しました。ヒヤリ・ハットを校内で共有し、教師と生徒に注意を促す。その積み重ねが、大きな事故の防止につながります。

危機管理の校内研修を、少なくとも年1回は行っているでしょうか。授業中や部活動中の事故を防ぎ、万一の発生時に対応するのは、現場の先生方です。日本スポーツ振興センターの「学校安全Web」(*3)には、学校での事故防止対策集や、全国の学校の安全に関する実践などが掲載されています。校内研修や生徒への安全教育に活用するとよいでしょう。

突然死の予防策として、心電図検査が挙げられます。学校保健安全法で小・中学校、高校の1年生に心電図検査が義務づけられていますが、東京都では、運動や部活動に積極的に参加する生徒や、体育的な行事の前に、運動負荷心電図検査を推奨しています。体育の授業中や体育的部活動中に突然死が起こっている状況から見て、実施の価値があると考えます。AEDを、事故時に速やかに使えるように

しておくことも重要です。使用訓練や定期点検を行い、マラソン大会などの時にはAEDを会場に移動させます。胸に直接装着するため、女子生徒は男子生徒よりも装着率が低い傾向にあります(*4)。男性教師が女子生徒にAEDをためらわずに使用できるよう、入学時に、保護者から事故時の使用の同意を得ておくことも検討してほしいと思います。

また、万一の場合に備える災害共済給付に未加入の生徒はいませんか。21年度は、全国で約6万4000人の高校生が未加入でした。

増える生徒の自主活動 生徒自身が安全管理を行えるように

今後、特に留意したいのは、探究学習等の推進に伴い、教師の目の届きにくい場所での生徒の自主活動が増えることです(図)。探究学習では、自分の設定した課題に取り組み上で必要な情報を収集するために、生徒のみで校外に出ることもよくあります。そのため、教師の目の届く範囲での集団行動と比べて、事故のリスクは高いと言えます。様々な危機を想定して、事故防止に努めることはもちろん、生徒への安全教育を徹底し、生徒が責任ある行動を取れるようにすることも、一層重要になるでしょう。

*3 <https://www.jpnsport.go.jp/anzen/> または、「学校安全Web」で検索してください。

*4 総務省近畿管区行政評価局「学校における救命活動に関する調査—AEDの使用を中心として—結果報告書」(令和2年3月)。

世の中トレンド解説

生徒の学びや進路選択、その後の人生に影響を与えるような革新的な技術や価値観を「社会のトレンド」として解説します。

メタバース

現実より都合がよい、快適な「もう1つの世界」

ユーザーがアバター（※1）などを使ってインターネット上で社会生活を送ることができる、「メタバース」と呼ばれるサービスが急速に普及しています。その言葉の定義はまだ定まっていますが、デジタル技術を用いて作り出された「もう1つの世界」と捉えられるでしょう。そこで過ごす人にとって、その世界は現実より都合がよく、長居したくなるように作り込まれています。SNSでは、コミュニケーションや情報共有が行われますが、メタバースでは、それだけではなく、ゲームや買い物、学びなど、多様な体験ができることが特徴だと言えます（図）。

メタバースが発展している背景には、デジタル技術の進歩と、人の価値観の変化があります。コンピューターの描画機能や反応速度、VR（※2）やAR（※3）などの進化は、より没入感の高い仮想空間をつくることに貢献しています。味覚や嗅覚、触覚を感じられる機能の開発も進んでおり、今後ますます魅力的なサービスが登場することでしょう。

また、今の社会では、多様性が尊重され、自分らしく生きやすくなった半面、多様な価値観が併存するために、摩擦や衝突が起きやすくなっています。メタバースやSNSでは、そうした現実世界では避けられない、価値観の異なる人との

かかわりを遮断して、気の合う人だけが集まって居心地のよい空間をつくることができます。

コロナ禍による影響も無視できません。学校や職場で、リモートによるやり取りが一般化し、人々の思考や行動が大きく変化しました。それにより、社会全体がメタバース的なものを受け入れやすくなったと考えています。

リアルとバーチャルを使い分けるバランス感覚が重要

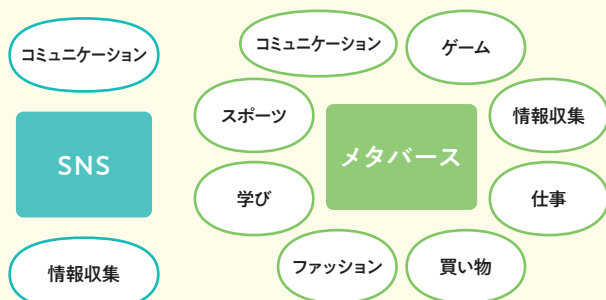
今では、それぞれの家から友人とゲーム内で集まって、おしゃべりするといった行動も増えてきています。そうした仮想空間に入り浸る生活に、どこか不健全さを感じる人もいますが、その価値観も今後、変化していくかもしれません。この先、交通機関を使って移動して人に会う行為は、時間や労力、お金がかかる上に環境負荷も大きいとして、敬遠される時代が来る可能性も否定できないと思います。

メタバースでは、性別や外見、年齢など、現実世界で固定されている属性から解放され、自分の思いのままに過ごせる自由さがあります。高齢者や体の不自由な人が、メタバースでスポーツを思い切り楽しんだり、現実世界の人間関係につらさを感じている人が、メタバースで居場所を見つけたりすることもあるでしょう。多様な体験を簡単に再現できるため、教育分野では、疑似的な留学体験や社会見学を行ったり、メタバースで授業をしたりといった活用も考えられます。

一方で、仮想空間から抜け出せなくなり、現実世界で生きる力が育ちにくくなるといった影響も懸念されます。特に、人格形成期の子どもは、失敗や他者との衝突などを通じて人間性が育まれますから、リアルとバーチャルをうまく使い分けられるバランス感覚が重要になるでしょう。

そのように、取り組むべき課題もありますが、メタバースの進化は、無視できない大きな潮流です。新しいものが現れる時は怖さを伴いますが、私たちはメタバースをむやみに遠ざけるのではなく、十分に知ること、よりよい生活に向けて活用することができるのではないのでしょうか。

図 メタバースで体験できることのイメージ



※岡嶋教授への取材を基に編集部で作成。

解説者



中央大学 国際情報学部 教授、学部長補佐

岡嶋裕史 おかじま ゆうし

専門は情報ネットワーク・セキュリティ。富士総合研究所勤務等を経て、現職。著書に『メタバースとは何か ネット上の「もう一つの世界」』（光文社新書）、『思考からの逃走』（日本経済新聞出版）等。

VIEWnext ONLINEでは、トレンド・ワードについて、誌面でお伝えし切れなかった内容を「学ぶ・働く・暮らす」の切り口で解説しています。右記の2次元コードからアクセスし、ご覧ください。



※1 メタバース上で自分の分身として使われるキャラクター。 ※2 Virtual Realityの略で、仮想現実と訳される。現実とは異なる仮想空間をつくり出す技術。

※3 Augmented Realityの略で、拡張現実と訳される。現実空間の中にデジタル情報を表示する技術。

For Teacher Section

教師個々の教科指導・進路指導に
役立つ事例や情報を、
先生方の思いを乗せてお届けする

P.44

お勤めの分掌▶

教務担当

担任

発問・課題設定をキーに見る

主体的・
対話的で
深い学び

授業実践

教科の見方・考え方を働かせる
問いや課題を通じて学びが深まる授業に迫る

化学 山口県立山口高校 石田純一

P.44

他者との協働による問題解決を通して、
次代のリーダーに必要な資質・能力を育成

こちらをご覧ください 特集では、6科目の授業実践を紹介

国語 P.8 / 生物 P.10 / 総合的な探究の時間 P.14 / 化学 P.16 /
地理 P.20 / 英語 P.22

P.48

お勤めの分掌▶

進路担当

学年団

担任

マイ・ストーリーを語れる

生徒を育む進路指導

これまでの自分と将来の自分を、
大学での学びと結びつけて語れる生徒を育む

3年次8・9月 志望理由書の作成・面接指導

岩手県立福岡高校 2021年度3学年団と進路指導部

学年団の教師、生徒が協働して、
志望理由書の作成、模擬面接に取り組む

P.50

お勤めの分掌▶

進路担当

学年団

担任

変化の激しい社会に飛び込む生徒に伴走
クローズアップ! 就職指導

社会や企業が変化する中、
就職活動を頑張る生徒をどう支援するか

志望先への熱意の言語化

3年次8月・9月(応募書類の作成～面接指導)

自分と企業をつなぐキーワードを探す
北海道札幌真栄高校

P.52

お勤めの分掌▶

学年団



チーム
新課程
学年主任

Supported by
ベネッセ文教総研

新課程初年度でも迷わない! 各月の指導のポイントをリストアップ

9月10月のポイント

生活リズムの確立と
文理選択への意識づけを図る

主体的・
対話的で
深い学び

授業実践

化学

他者との協働による問題解決を通して、

次代のリーダーに必要な資質・能力を育成

山口県立山口高校 石田純一

8:45 前時のポイントを振り返る



投影された席次表に従って生徒は移動し、本時のペアを確認すると、まずは Google スプレッドシート上で石田先生から投げかけられた、前時の学習内容に関する「全体の問い」について解答。前時の要点を確認した後、石田先生から授業プリントが配布された。

本時の概要

【対象／教科／科目】 1年生／理科／化学基礎
 【分野・単元】 物質の変化・物質と化学反応式（全4時間のうちの4時間目。P.47に本時の指導計画を掲載）
 【育成を目指す資質・能力】 知識、技能、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性
 【学習内容】 本時のポイントを2つ（気体の密度と分子量の関係・気体の平均分子量）に分けて解説した動画を、ペアを組んで分担して視聴。それぞれの動画の内容を説明し合った上で、問題に取り組んだ。その後、それぞれの学習内容を2人で統合し、日常生活と関連つけた問題に取り組んだ。

主体的な学び
対話的な学び
深い学び

9:15 2つの動画の内容を統合した演習



説明が終わったペアから、2つの動画の内容を統合することで解ける問題に取り組んだ。石田先生は、「空気よりも軽い気体とは、どういう気体？」「気体の密度と分子量の関係は？」「平均分子量の求め方は？」と、2つの動画の要点に関する問いを投げかけながら、解き方を解説した。

いしだ・じゅんいち 教職歴10年。同校に赴任して4年目。理数科副主任。理数科1学年担任。理科。ICTを活用したグループワークを積極的に実践している。

学校概要

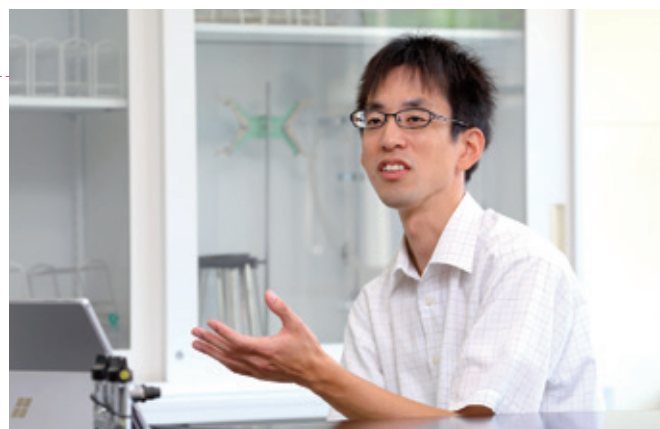
◎創立150年を超える県内屈指の伝統校。校訓「至誠剛健」の下、「自由な気風」「進取の気風」「文武両道の気風」の精神にのっとり、「知・徳・体のバランスのとれた、次代を切り拓く社会のリーダーたる人材」を、育てたい生徒像に掲げている。

◎設立 1870（明治3）年

◎形態 全日制／普通科・理数科／共学

◎生徒数 1学年約300人（全日制）

◎2022年度入試合格実績（現役のみ） 国公立大は、東北大、筑波大、東京医科歯科大、東京工業大、東京大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大、岡山大、広島大、山口大、九州大などに205人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ246人が合格。



9:00 動画の内容をペアで説明し合う



ペアを組んだ相手に、自分が視聴した動画の内容を説明。相手の説明が不十分で、理解があいまいな生徒が出ないように、石田先生は机間指導をして、ペアの説明に耳を澄ましていた。説明が不十分なペアを見つけると、説明の補足を行った。

8:50 教師自作の解説動画を視聴



石田先生は、本時のポイントを2つ（気体の密度と分子量の関係・気体の平均分子量）に分け、それぞれを10分で解説した動画を事前に作成。生徒は、その2本の動画をペアで分担して視聴した。石田先生が授業プリントを使って解説を進めるのが、毎回の動画のスタイルだ。

本時のキー課題

9:45 学習内容を踏まえた問いを作成



本時の学習内容を要約したスライドを投影し、石田先生がまとめの説明を行った。最後に、本時の内容を踏まえた「私の問い」とその答えを生徒一人ひとりが考え、Google スプレッドシートに入力。その中から一番よい問いを石田先生が選び、次時の「全体の問い」として全員に投げかける。

9:25 統合した学習内容を活用する

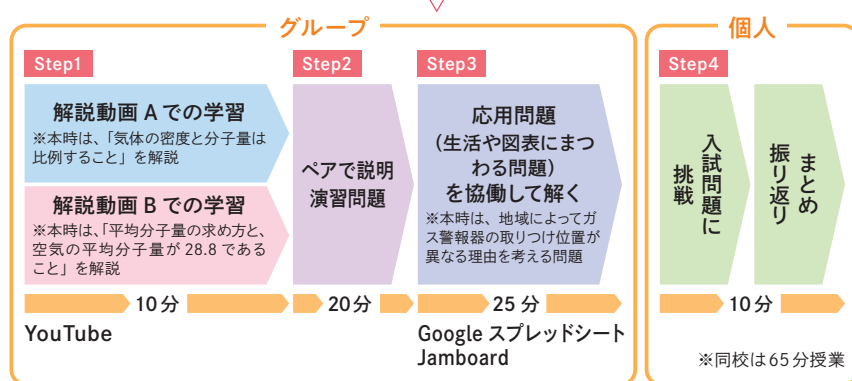


2つの動画の学習内容を活用して考える、日常生活にかかわる問題として、ガス警報器の取り付け位置に関する問題に取り組んだ。ペアで考察し、解答をJamboardに投稿。その中から、石田先生が複数の解答をピックアップし、解説を行った。(© Google)

●私が目指す授業
他者との協働の中で
問題解決力を育む

私は、これまで勤務した3校で、担当学年の模擬試験の化学の平均偏差値を県内1位にしてみました。その結果からも、教科学力に関する指導方法については、自分なりに研究が進んだと思っています。しかし、教科指導の目標は、教科学力の育成だけではありません。本校は、「次代を切り拓く社会のリーダーたる人材」を、育てたい生徒像としています。これからのリーダーは、自分の専門分野の知識を身につけるだけではなく、異なる分野のリーダーたちと協働して、複雑な問題を解決したり、新しい価値を創造したりする力が必要です。そこで私は、高校生活の核となる授業で、協働することを意識させながら、育てたい生徒像へと着実に近づいていく授業を目指そうと考えているようになりました。もちろん、難関大学を目指す生徒が多い本校では、ペーパーテストの点数は今後もおろそかにできませんので、育てたい生徒像の実現との二兎を追う授業を模索しているところです。

図 石田先生の1コマの授業の流れ



※石田先生への取材を基に編集部で作成。

●私の発問・課題設定の観点

互いの知識を統合し、活用する問題に取り組みさせる

他者との協働の意義を実感しながら化学を学べるよう、私が実践しているのが、ペアワークを軸にした授業展開です(図)。

本時は、ある気体が空気よりも重いか、軽いかをどのようにして判断するのかをテーマとした。生徒はまず、テーマを考える上でのポイントを私が解説した2つの動画を、ペアで分担して視聴しました。その後、動画の内容に即した授業プリントを使って、自分が視聴した動画の内容を相手に説明し、2つの動画の内容を統合して解く演習問題に協働して取り組みました。本時は、一方の動画で、気体の密度と分子量が比例することから、気体の重さの比較は分子量で判断すればよいことが、そしてもう一方の動画で、空気の平均分子量が28・8であることが理解できていれば解ける問題でした。そのようにして、他者と情報を共有し、問題に取り組みむことを通じて、リーダーに必要な、情報を統合して思考する体験を授業で積ませています。そして、時間に余裕がある時は、入試問題に個人で挑戦させます。

応用問題では、解説動画で得られた知識を統合するだけでなく、知識を活用させるようにしています。本時であれば、前の単元で学んだ日常生活で用いられるガスの種類に関する知識などと、今回学んだ知識をつなげながら考察するよう、地域によ

てガス警報器の取り付け位置が異なる理由を考えさせました。

ペアで応用問題に取り組ませた際、私は、生徒がガスの分子量と空気の平均分子量を比較できているかどうかに注意しながら机間指導を行いましたが、話し合いを通して互いの思考を深めたことで、火災時に発生する一酸化炭素や室温の変化にまで着目しているペアもありました。そうした、私の想定を超えたアプローチが生徒から生まれやすいのも、生徒たちが協働的に知識を統合していくこの授業の魅力だと思います。

図で示したような授業展開は、1年間を通して行っています。時には自分1人で考えてしまい、説明する側、聞く側双方の態度がぞんざいになってしまふペアも見られます。そのような生徒には、ペアワークは他者と協働して問題を解決する力を身につけるためにしているのだと、授業のねらいを改めて説明しています。

授業ごと、単元ごとに自分の成長を自覚させる

授業の最後には、自分が教師になったつもりで、その日に学んだ内容を踏まえて、「私の問い」とその答えを作り、Google スプレッドシートに

入力させています。全員の問いの中からベストのものを私が選び、次の授業の冒頭で生徒に提示し、前時の授業の振り返りとして取り組ませています。本時であれば、「ヘリウムを入れた風船が浮かぶのはなぜか」「金星ではメタンは浮くか」といった問いが生徒から出てくるとしています。

また、新たな単元に入った時は、「変容シート」に取り組ませています。本単元では、同シートに「原子量と何か」「気体の質量と体積との間にはどのような関係があるか」といった5つの問いを掲載し、単元の最初に取り組ませました。そして、単元の最後に、改めて「変容シート」の5つの問いに取り組ませます。単元の内容を学んだ後ですから、5つの問いに対して、生徒は科学的な知識に基づいた解答ができるようになっていきます。「変容シート」は、生徒にとっては文字通り、自分の変容を確認するためのツールであり、私にとっては、定期考査前などに各単元の生徒の理解度を把握するための材料になっています。

授業ごとの「私の問い」とその答え、そして単元ごとの「変容シート」を使って、主体的に学習に取り組む態度を評価しています。

VIEWnext ONLINE では、
本時の授業の様子を
ダイジェスト動画で紹介！

VIEWnext ONLINE

検索



講義型の授業をしていた時と比べて、成績下位層の生徒は確実に減りました。協働的に学ぶことで、学習に対する意欲が高まるからでしょう。ペアワークでは、「よく分かった」「ありがとー」といった声が聞こえてきます。そつた声のかけ合いが、クラス全体に広まってほしいと思っています。

課題は、リーダーとしての資質・能力が授業で育まれたかを評価する仕組みづくりと、上位層の生徒のさらなる変容の促進です。今後は、個別最適化という視点で授業改善を進めて、上位層の生徒の成長を加速させたいと思っています。

●成果と展望

下位層の生徒が減少
課題は上位層の伸張

単元の指導計画

【教科・科目】理科・化学基礎 【分野・単元】物質の変化・物質と化学反応式 【設定時数】全4時間（本時は4時間目） 【単元目標】物質と粒子数、質量、気体の体積との関係について理解する。

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価 方法
1	原子量・ 分子量・ 式量	「原子の絶対質量」から「分子量・式量」を求めるまでの一連の流れを理解することを通して、相対値を用いる意義や平均という概念について理解を深める。 【知識、技能、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性】	①前時からの変容シートの記入 ②『『全体の問い』とその答え』を Google スプレッドシートに入力 ③絶対質量と相対質量についての解説 ④YouTubeの自作動画での学習（A：原子の絶対質量→原子の相対質量の計算、B：原子の相対質量→原子量の計算） ⑤教え合い ⑥演習（原子の絶対質量→原子量の計算、分子量・式量の計算） ⑦発展（質量数と相対質量の関係） ⑧『『私の問い』とその答え』を Google スプレッドシートに入力	【主体的な学び】②⑧ Q&A の入力を通して、学習サイクルをつくらせる。④～⑦自分しか見ていない動画の内容をペアの相手に説明し、互いの知識を共有するという点で、一種のリーダーであることを認識させる。 【対話的な学び】④～⑦学習内容を2つに分け、それぞれの解説動画を作成し、ペアの生徒各々に視聴させる。また、その2つの内容を統合することで解ける適切な課題を設定することで、対話を生み出させる。なお、ペアの生徒は、毎回ランダムに指定する。 【深い学び】①変容シートは単元前後の自分の考えの変容や深化について確認するものであるため、現段階で正答が書ける必要はないことを伝える。分からない・知らない問いに対しても、可能な限り推測して記入させる。③相対質量の意義や重要なポイントについて考察させる。⑥計算指針の立て方や有効数字の計算法についてアドバイスし、積極的に演習に取り組ませる。⑦12C 原子の構造を図示させることで、質量数と相対質量の関係についての考察を円滑に行わせる。	(a) 知識・技能（定期考査） (b) 思考・判断・表現（定期考査／変容シート） (c) 主体的に学習に取り組む態度（変容シート／Google スプレッドシートへの『『私の問い』とその答え』『『全体の問い』とその答え』の入力内容）
4	気体の密度と分子量	気体の密度と分子量が比例することを理解し、実生活での応用について考察する。 【知識、技能、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性】	①『『全体の問い』とその答え』を Google スプレッドシートに入力 ②YouTubeの自作動画での学習（A：気体の密度と分子量の関係、B：気体の平均分子量） ③教え合い ④演習（空気より軽い気体） ⑤発展（Jamboard 上でガス警報器の位置を検討する） ⑥『『私の問い』とその答え』を Google スプレッドシートに入力 ⑦変容シートの記入（次時の最初）	【主体的な学び】①⑥ Q&A の入力を通して、学習サイクルをつくらせる。②～⑤自分しか見ていない動画の内容をペアの相手に説明し、互いの知識を共有するという点で、一種のリーダーであることを認識させる。 【対話的な学び】②～⑤学習内容を2つに分け、それぞれの解説動画を作成し、ペアの生徒各々に視聴させる。また、その2つの内容を統合することで解ける適切な課題を設定することで、対話を生み出させる。なお、ペアの生徒は、毎回ランダムに指定する。 【深い学び】⑤前単元において学んだ日常生活で用いられるガスの種類に関する知識や、④の解答を生かすことに気づかせる。 ⑦変容シートを記入させながら、単元前後の自分の考えの変容や深化について意識するよう促す。	(a) 知識・技能（定期考査） (b) 思考・判断・表現（定期考査／Jamboard の内容／変容シート） (c) 主体的に学習に取り組む態度（変容シート／Google スプレッドシートへの『『私の問い』とその答え』『『全体の問い』とその答え』の入力内容）

※石田先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全4時間分は、ウェブサイト「VIEW next ONLINE」(<https://view-next.benesse.jp/>) からダウンロードできます。TOP → 学校教育情報誌『VIEW next』 → 高校版バックナンバー』でご覧ください。

「マイ・ストーリー」を描き、それを語れる力が、これからの大学入試で希望進路を実現するために必要とされることを検証し、そうした力を生徒に育む教師の指導や支援のあり方・方法を、実践事例を通じてお伝えしたVIEWnext高校版2021年8月号・特集はこちら▶



マイ・ストーリー を語れる生徒を育む進路指導

「マイ・ストーリー」とは、生徒一人ひとりの「自分のこれまでの学びや活動、その成果や結果に至るまでのプロセス、これからの展望」を指す。総合型選抜や学校推薦型選抜（以下、推薦型選抜）を始めとするこれからの大学入試に向けて、「マイ・ストーリー」を描き、それを語れる力を生徒に育む実践事例を紹介する。

3
年次8・9月

志望理由書の作成・面接指導

学年団の教師、生徒が協働して、

志望理由書の作成、模擬面接に取り組む

岩手県立福岡高校 2021年度3学年団と進路指導部

マイ・ストーリー
3年次8・9月頃
の課題

- ・担任との面談を通して固まった志望理由を、志望理由書に「マイ・ストーリー」として表現する
- ・入試本番の面接での受け答えが、志望理由書に記載した内容と齟齬がなく、志望の熱意を自分の言葉として語れるようにする

✓ 学年主任と進路指導主事が 「マイ・ストーリー」をチェック

生徒に推薦型選抜への挑戦を推奨することを、学年全体の方針とした岩手県立福岡高校の2021年度3学年団。学年主任を務めた横坂さくら先生は次のように振り返る。

「学年団の先生方とは、社会課題に対する生徒の意識や探究学習での取り組みを面談などで掘り起こして、少しでもチャンスのある生徒には、推薦型選抜への挑戦を勧めることを、3年次の4月の時点で確認しました」

それは単なる受験機会の拡大という理由か

らではなかったと、3学年担任を務めた長岡拓郎先生は語る。

「過去10年間の本校の卒業生のマーク式の模擬試験から大学入試センター試験や大学入学共通テストまでの点数の伸びを分析したところ、推薦型選抜で進学した卒業生は、一般選抜で進学した卒業生よりも、大学入学共通テストまでの点数を大きく伸ばしていることが分かりました。高校での経験や志望理由、大学での学びの目的を整理し、志望理由書などでそれらをアウトプットすることが、受験勉強や大学入学後の学びへの意欲を高めるのだと思います」

担任との面談を通して、多くの生徒が7月末には出願校を絞り込み、8月からは、総合型選抜の出願者が志望理由書の作成に着手した。ある程度形になったと担任が判断した志望理由書は、学年主任の横坂先生と進路指導主事の高橋英明先生が目を通し、管理職のチェックを受ける体制を採った。

多くの志望理由書は、学年主任と進路指導主事から何度も差し戻された。志望理由が「マイ・ストーリー」として語られていないケースが少なくなかったのだ。多くの生徒が3回以上、中には10回近くのフィードバックを受けて、志望理由書をブラッシュアップしていった。

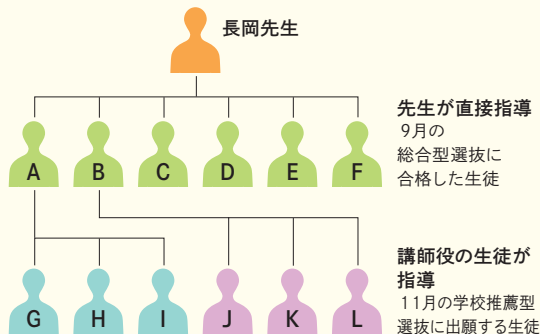
「『きっかけとなった興味・関心、経験』『高校での学び』『大学で学びたいこと』など、志望理由を語る上で大切な要素の一つひとつはそれなりに書けているけれども、よく読むと、一貫性が乏しく、説得力に欠けていました」（高橋先生）

4月から7月末まで面談を重ね、丁寧に生徒の志望を掘り起こしてはいても、志望理由書という形で「マイ・ストーリー」を語れるかどうかはまた別の問題だったと、担任を務めた佐藤翔太先生は振り返る。

「志望理由を『マイ・ストーリー』として文章で表現することの難しさを痛感しました。志望理由書が差し戻された生徒とは、職員室で大学のウェブサイトを見ながら改めて面談し、『大学で学びたいことと、社会貢献

生徒同士で進める模擬面接の仕組み

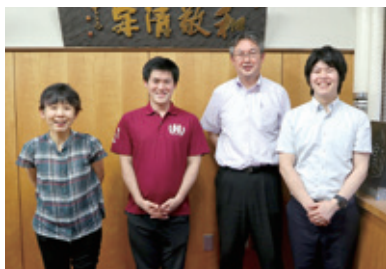
長岡先生のクラスでは、9月の総合型選抜で合格した6人の生徒が、入試本番の面接の経験を生かして、11月の学校推薦型選抜の面接対策の講師となった。講師役の生徒はそれぞれ3人程度の生徒を担当し、長岡先生から学んだ面接中のマナーなどを伝えた。その後、それぞれのグループ内で模擬面接を何度も繰り返した。



生徒間で入試対策の進捗を共有

クラウド上で入試対策の進捗状況の共有を行った。志望理由書や小論文の添削指導、模擬面接の回数などとともに、満足いく対策ができている項目には○を、出願が済んだら◎を、生徒が毎朝、ホームルームの時間にスマートフォンで入力。ほかの生徒の入試対策の進捗が分かることで、対策に臨むモチベーションの向上につながった。

※学校資料と取材を基に編集部で作成。



左から／横坂さくら(21年度3学年主任)、長岡拓郎(同3学年担任)、高橋英明(進路指導主事)、佐藤翔太(同3学年担任)

学校概要

- ◎設立 1901(明治34)年
- ◎形態 全日制・定時制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約140人
- ◎2022年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、弘前大、岩手大、秋田大、福島大、埼玉大、新潟大などに61人が合格。私立大は、芝浦工業大、東京理科大、法政大、明治大などに延べ72人が合格。

志望理由書の作成と模擬面接において、「マイ・ストーリー」を描く生徒と、それを支援する教師の姿をさらに詳しく紹介!

VIEWnext ONLINE ▶▶



の目標のつながりが分かりにくいよね』『志望校がこの大学であるべき理由を明確に書く』『』などと助言をしました」

推薦型選抜対策の進捗管理で、クラスとしての集団の力を生かす

志望理由書で「マイ・ストーリー」を表現することができた生徒たちが次に臨むのは、面接対策だ。面接という特殊な場面で気負ってしまうからか、模擬面接においても、話す内容が志望理由書の内容とずれてしまう生徒が少なくなかった。長岡先生は、志望理由書を何度も書き直したように、模擬面接は1回の時間は短くてもよいので、回数を重ねることが大切だと力説する。

「私のクラスでは、総合型選抜に合格した6人が、入試本番の面接の経験を生かして、

学校推薦型選抜の面接対策の講師を務めました。講師1人につき3人程度の生徒を担当してもらい、講師役の生徒を含めたグループ内で、受験生役、面接官役を交替で務めながら模擬面接を繰り返しました」(長岡先生)

長岡先生のクラスでは、生徒が模擬面接の実施回数など、入試対策の進捗をクラウド上で共有していたこともあり、生徒たちは競うように模擬面接に真摯に取り組んだ。中には、50回以上も模擬面接を受けた生徒もいたという。

志望理由書の作成と模擬面接という過程を通して生徒に「マイ・ストーリー」を描かせ、それを語る力を確かなものにした同校は、22年度大学入試において、139人の卒業生のうち、国公立大学の推薦型選抜に挑戦した生徒の約半数にあたる42人が合格という、輝かしい成果を収めた。

クローズアップ! 就職指導

志望先への熱意の言語化

3年次8月・9月
(応募書類の作成・面接指導)

履歴書と面接で 生徒の熱意を 企業に伝える

9月5日から各企業・事業所（以下「企業」）が応募書類の受け付けを開始するため、8月に行う高校の就職指導は、応募書類の作成が中心となる。応募書類として提出するのは調査書と履歴書で、企業はそのほかの書類の提出を求めているのではない。また、履歴書は、「全国高等学校統一用紙」を使用する決まりとなっている。

高卒就職では、書類のみで選考を行うことは禁止されており、面接や適性検査、一般常識を問う筆記試験などを経て、採否が決定される。中でも面接は、企業が生徒の志望の熱意を見る重要な機会であり、履歴書に書かれている志望理由との一貫性や具体性も見られる。

今回は、学校幹旋による就職指導の山場である、履歴書の作成と面接指導について、その連続性も念頭に置きながら実践事例を見ていく。

実践事例

自分と企業をつなぐキーワードを探す 北海道札幌真栄高校

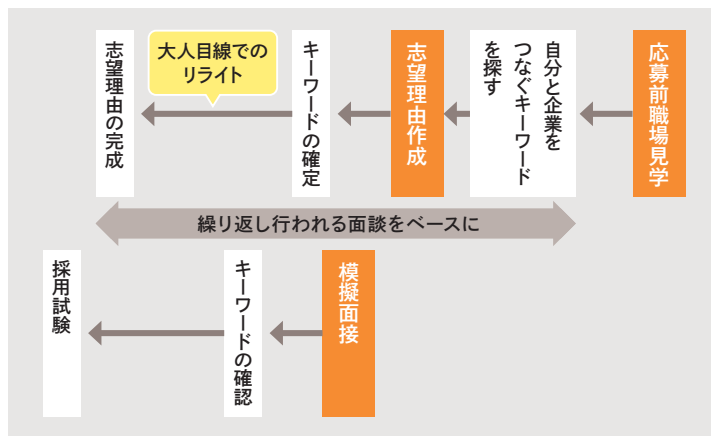
大人目線でのリライトを経て、 志望理由を完成

学校幹旋による高卒就職の中で、就職指導担当の教師が最も力を入れるのは、生徒の志望先への熱意を高め、納得感のある就職を実現させることだ。生徒の志望先への熱意を高めることは、企業側の「この生徒と一緒に働きたい」という採用の意思決定を後押しすることにもつながるからだ。

志望先への熱意を形として表すのが、履歴書の中の志望理由、そして面接だ。北海道札幌真栄高校、そして、前任校の工業高校で就職指導に携わってきた三浦晃裕先生は、職場見学、履歴書の作成、面接指導の流れの中で、生徒が「自分と企業をつなぐキーワード」を見つけることが重要だと説明する。そのキーワードの発見の場となるのは、丁寧に繰り返される面談だ（図1）。

「7月中の応募前職場見学から戻ってきた生徒に、『どんなところがよかった?』『あの会社で、

図1 キーワードを軸に進む就職指導の流れ



※学校資料を基に編集部で作成。

自分にできそうなことは？」などと問いかけていきます。すると、『部活動を通して、困難な状況の中でも明るく振る舞える力をつけたので、職場のみんなを元気にしたい』『適性検査でも高スコアだった私の強みである協調性を生かしたい』などと、自分の思いを言葉にし始めます。そこで、『明るく振る舞える力や協調性は、企業が求めている人材像にどのように合っていると思う？』などと問いかけることで、生徒は、自分と企業をつなぐキーワードを見つめます(図2)。

キーワードのめどがついた生徒から、履歴書中の志望理由を書くよう指導している。

「ほとんどの生徒は、最初は理路整然とした文章を書くことができません。しかし、その段階では、『自分の長所である協調性を、人材管理などの業務で発揮したい』のように、自分と企業をつなぐキーワードが盛り込まれていればよしとしています」

その後、北海道教育庁から派遣される進路相談員(※)と分担して取り組むのが、生徒の志望理由の「大人目線でのリライト」だ。面談で把握した生徒の適性や強みを念頭に、生徒の書いた志望理由を大人目線の言葉に変換し、リライトする。

「生徒は、書き直された文章を見て、『これが言いたかったのです』と喜びます。しかし、私が、『では、この志望理由を企業に出す？』と尋ねると、生徒は首をかしげます。リライトされたものが自分らしい文章になっていないと、生徒は分かっているからです。そこで、自分らしい言葉に置き換えたり、具体的なエピソードを加えたりしながら、自分にしか書けない志望理由に練り上げていきます」

同校では、9月上旬には、就職希望のすべての生徒が、リライトを経て、志望理由を書き直して

完成させる。

「夏季休業に入る段階では、多くの生徒は志望理由を書けていませんが、それは志望理由が『ない』ではなく、『言葉にできない』だけなのです。生徒が思いを言語化するための土台として、大人目線でリライトした文章を見せています」

志望のキーワードを 模擬面接でも確認

志望理由の検討と並行して模擬面接も行つた。

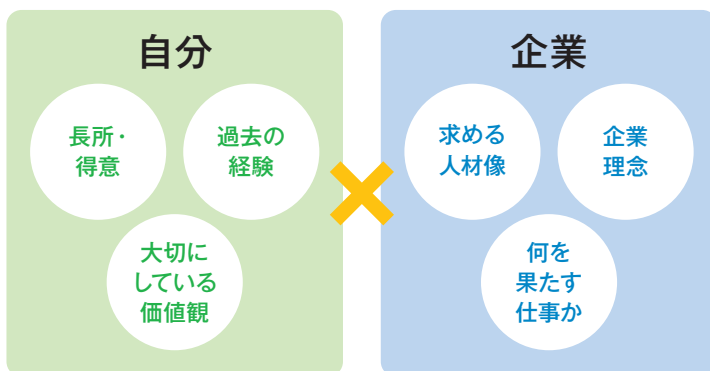
「企業の採用担当者は、『履歴書に書かれている志望理由がどれだけ熱を持ったものなのかは、履歴書の文面ではなく、面接での言葉で判断する』と言います。そのため、生徒には、『面接で、志望理由を自分の言葉で熱く語れるかが採否の鍵を握る』と話しています」

面接指導でも大切にしているのは、自分と企業をつなぐ熱いキーワードだ。

「教師は、模擬面接の前に、生徒の志望先の会社案内などを見て、生徒が準備しているキーワードを引き出す質問を考えます。また、模擬面接の振り返り際には、生徒に『君が語った経験とそこでの学びは、企業が求める人材像に合致するか、キーワードとして大切にしたいね』などとアドバイスをします。模擬面接は、生徒にキーワードを確認させる場なのです」

高卒就職の面接では、生徒の長所を見つけて採用につなげてあげたいという思いを前面に打ち出す企業も多い。だからこそ、模擬面接では、生徒に臆することなく、自分と企業をつなぐキーワードを語らせたいと三浦先生は考えている。

図2 志望理由の検討時に生徒に意識させる、自分と企業のつながり



志望理由を書かせる際に、三浦先生は上図のような視点を提示し、生徒に自分と企業をつなぐキーワードを考えさせる。

※学校資料を基に編集部で作成。



1 学年担任
進路指導部

三浦晃裕

みうら・あきひろ

教職歴 31 年。同校に赴任して 5 年目。

学校概要

- ◎設立 1983 (昭和 58) 年
 - ◎形態 全日制 / 普通科 / 共学
 - ◎生徒数 1 学年約 200 人
 - ◎2021 年度進路実績 (現役のみ)
- 4 年制大は、公立千歳科学技術大、札幌学院大、札幌国際大、北星学園大、北海学園大、日本医療大、専修大、東海大などに延べ 58 人が合格。短大・専門学校進学 73 人。就職 11 人。

* 進路相談員は、各校の進路指導担当教員と連携し、就職を希望する生徒の、就職活動にかかわる支援等を行う。



チーム 新課程 学年主任

Supported by
ベネッセ文教総研

9月

10月

のポイント

生活リズムの確立と文理選択への意識づけを図る

の確立は極めて重要だと言えます。

新課程1期生における文理選択・

夏季休業明けは、1学年団の先生方にとって、最も生徒の様子が気になる時期ではないでしょうか。学校によっては、夏季休業明けすぐに文化祭や体育祭があるため、比較的ゆったり過ごした夏季休業から、生徒の生活は一変して慌ただしくなります。そして、秋には進路指導の山場の1つである「文理選択・科目選択」が控えています。

夏季休業明けに大切なのは、生徒に1学期の生活リズムを取り戻させることです。そのため、学習・生活記録などを通じて、家庭学習の習慣の確立に改めて取り組まさせている先生も少なくありません。また、新教育課程においても、2学期以降、高校の授業は1学期と比べて進度が速くなり、内容も高度化します。2学期以降、生徒に苦手科目が生まれやすいことを考慮すると、学習習慣

科目選択です。大学入試の動向も気になるところです。しかし、新課程入試の入試科目を発表している大学は、現段階では少数です。そんな中で、文理選択において、「総合的な探究の時間」と関連つけて選択に臨ませる指導も見られます。課題の選択や設定の背景にある生徒の思いを聞きながら、大学で学びたいことなどを考えさせ、文理選択へとつなげるのです。同時に、総合型選抜や学校推薦型選抜への意識づけも行っていくことができるでしょう。

2学期の始まりである、9月・10月は、特に次の2点について学年全体、必要に応じて個別の生徒への対応をご検討ください。

●夏休み、行事からの切り替え

ベネッセの「スタディーサポート

9・10月のチェックポイント

数か月先を見通した新課程初年度学年ならではのポイントです。
詳細は [ハイスクールオンライン〈先生SNS〉](#) でご覧ください。

10月

9月

テーマ

コンテンツ例

- | | | | | |
|---|---|--|--|--|
| <p>☐ 夏季休業からの切り替え</p> <p>●生活習慣・学習習慣が崩れた生徒のケア</p> <p>●「スタディーサポート」1年2回を活用した、生徒の状況確認</p> | <p>☐ 文理選択・科目選択に向けた入試情報の確認</p> <p>●新課程入試の動きの確認</p> <p>●大学の研究内容の確認</p> <p>●各大学の総合型・学校推薦型選抜の情報の収集と対応計画の立案</p> | <p>☐ 行事を通して生徒の成長を支援</p> <p>●行事を通して学校の求心力を高める</p> <p>●中間審査を利用した、学習への気持ちの切り替え</p> | <p>☐ 次年度以降の教育課程の検討</p> <p>●新課程入試科目を踏まえて自学年の2・3年次及び次の学年以降の教育課程の見直し</p> | <p>☐ 11月「ベネッセ総合学力テスト」に向けた指導</p> <p>●基礎学力の定着と、読解力・記述力育成につながる学習法の指導</p> |
|---|---|--|--|--|

本コーナーはハイスクールオンラインの〈先生SNS〉のコーナーと連動しています。〈先生SNS〉では詳細の情報・資料をご提供しています。また、先生方が直面される課題やその解決方法の共有の場としてもぜひご利用ください。

ハイスクールオンライン 〈先生SNS〉

<https://teacher.benesse.ne.jp/>



※ハイスクールオンラインのIDをお持ちでない先生は、校内でご確認いただくか、WEBサポートデスク0120-350124までご連絡ください。

〔受付時間〕
月～金 8:00～18:00 / 土 8:00～17:00
(祝日・年末・年始を除く)

ここからお入りください

ほかの先生に相談したい時は⇒相談室へ
使える資料で負担軽減⇒資料室へ



チームの仲間へmessage

細かな見取りと新たな価値の創造を
可能にする学校文化の醸成

藤田奈美

広島県立呉三津田高校 1学年主任

1 年生が入学して3か月が経ち、早くも1学期の終わりが見えてきました。

中学校生活の大半をコロナ禍で過ごした生徒が入学してくるということに加え、本校では40人の定員増もあり、新入生の様子が気がかりな中、4月を迎えました。そのような状況で、1学年団では、入学前の中高連携、担任面談、授業や部活動での観察などを通し、学力面と子どもたちの様子などの見取りを重ねてきました。

本校では、生徒の様子は職員室の中で常に情報共有されており、全教職員で全生徒を見取るという風土があります。また、中学校生活から高校生活へのスムーズな移行を目指し、本年度からは、1か月をかけて徐々に学校生活や高校の授業に慣れるようにしたことや、2年生によるチューター活動、積極的なカウンセリングの実施など、新たな試みを、各教科・分掌・他学年の協力により、実施しているところです。様々な負担がかかる中、生徒にかかわってくださる先生方には、感謝しかありません。

学年や分掌を超えた細かな見取りや新たな取り組みが行えるこの土壌は、転勤された先生方を含め、教職員団により醸成されてきた本校の強みだと、学年主任になって改めて実感しています。社会のニーズが多様化する中で、私たち教職員も新たな価値を創造しなければなりませんし、それはともに働く教職員がお互いを尊重し、個としてもチームとしても働ける環境があることで可能になると考えます。1学年主任として、この学年の生徒をどう育てるかを考えることはもちろんですが、生徒のためにも、働く場としての学校文化の醸成に、微力ながら尽力していきたいと考えています。

1年2回」をご受験予定である場合は、1年1回から2回にかけての生徒個別の変化を特にご確認ください。着目ポイントとして、集団の変化は、「学力×学習バランス」「学習の4要素のレベル」「学習時間」「学校生活振り返り」などをご確認ください。

●行事を通して生徒の成長を支援
生徒自身が行事に積極的に取り組むことは、自分のよさや強みを見つめるきっかけとなります。その体験が学習意欲にも結びつくよう、行事を通じて生徒の成長を支援していただけるとよいと思います。

第2回「チーム新課程学年主任ウェブセミナー」

(7月22日実施)

アーカイブ配信のご案内

7月22日(金)には、第2回となる1学年主任の先生対象のウェブセミナーを実施しました。「新課程1期生の1学期の姿を可視化し、2学期以降の学年運営の工夫に生かす」というテーマで、ウェブセミナーを実施しました。ベネッセ文教総研からは、2021・22年度のスタディーサポートの全国データを分析し、学力と学習全般において、差異がある点を抽出し、新課程1期生の特徴や課題をお伝えしました。また、それらに向き合い、実践されている高校の先生にご発表もいただきました。

セミナーの内容

- 1 「スタディーサポート」「基礎力診断テスト」の全体傾向から見る新課程生の姿
- 2 実践事例発表：広島県立呉三津田高校
「入学当初からの生徒の見取りと学年団での対応」
- 3 実践事例発表：長崎県立諫早高校
「探究をいかしたキャリア検討会」
- 4 生徒の成長を促す学年運営の振り返り：授業デザイン研究所

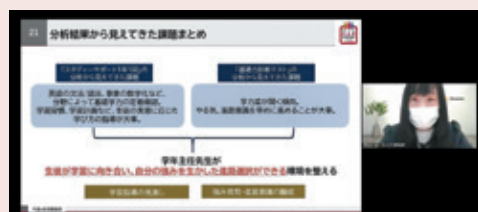
◎本ウェブセミナーのアーカイブ動画は、**ハイスクールオンライン**で視聴できます。

ウェブセミナーをご視聴、講演資料をダウンロードいただけます。ぜひ、ご覧ください。

『ハイスクールオンライン』トップページ > 指導「新課程」> 指導と学習評価 より、ご覧ください。

<https://benesse-hs.jp/ub57a>

※ログインには、ハイスクールオンラインのIDが必要です。



「スタディーサポート」「基礎力診断テスト」の全体傾向から新課程生の姿を分析



今号が先生方のお手元に届く頃、実は私は、産休・育休に入っています。東京都が育休の新名称を「育業」と発表し、話題にもなりました。VIEW next 編集部は、全国の学校を取材するため、出張の多い職場です。身重な私は、長距離の移動が難しく、今号では、オンラインで取材するコーナーや、目次などの製作を担当しました（たくさん出張に行ってくれた仲間に本当に感謝です！）。

ウェブサイト『VIEW next ONLINE』の運営も担当したのですが、先生方はもうご覧いただいていますでしょうか。スマートフォンやパソコンで本誌の記事を読めるほか、誌面の内容を深掘りしたウェブオリジナル記事や、ウェブ限定のコンテンツもあります。私はしばらく子育てにてんてこ舞いになりそうですが、自宅で『VIEW next ONLINE』を見て、教育情報のキャッチアップだけは続けたいと思っています。（佐塚）

本誌・ウェブサイトの 読者モニターを募集します

詳しくは、以下にアクセスしてください。
ご応募をお待ちしております。

『VIEW next』高校版
モニター募集
<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article10441/>



『VIEW next ONLINE』
モニター募集
<https://view-next.benesse.jp/view/web-all/article01254/>



VIEWnext

高校版 2022年10月号

10月14日発刊

（予定）

『VIEW next』高校版は
年6回の発刊です

先生方から
ご意見を
紹介します

Reader's VIEW

2022年6月号へのご意見

教師も生徒も、「失敗できる」環境が重要

6月号の特集「生き生きと働き続ける」の課題整理を読み、確かに教師間のつながりが以前よりも弱くなってきていると感じた。コロナ禍の影響で、歓迎会や飲み会などが気軽に行えないことが背景の1つにあると思うが、そうしたことに頼らなくてもよいコミュニケーションのあり方について探っていきたいと思った。その意味で、東京都・私立東一の江幼稚園の「失敗しても大丈夫」と管理職が言い続けるという取り組みに共感した。教師も生徒も、「失敗できる環境」が重要だと改めて認識した。ただ、「失敗しても大丈夫」という考え方が、小学校、中学校、高校と、学校段階が上がっていくに連れて、「失敗はよくない」という考え方になる背景には何があるのかを考えていかなければならないとも感じた。

静岡県立吉原工業高校 松山 陸

日常で「事実承認」を実践していきたい

6月号の特集「生き生きと働き続ける」では、京都教育大学の片山紀子教授の記事に大いに共感するとともに、役立った。特に私が実践しようと思ったのが、「事実承認」だ。片山教授がアドバイスされていたように、周りの教師がどのような授業を目指し、どのように生徒とかかわろうとしているのかをよく見て、その取り組みに対し、仲間として声をかけることは、とても大事だ。また、私が日常的に心がけていることだが、困難なことが起こっても、1人で悩んだり、重荷を背負ったりしないように、周りに共有して、助けてもらうことも大切だと改めて感じた。

和歌山県立橋本高校 寺田順子

「覚えること」とどまらない学びを探究

6月号の「主体的・対話的で深い学び 授業実践」で紹介された富山県立富山北部高校の嘉志摩有希先生の授業実践は、同じ富山県の教師ということもあり、とても励まされた。「歴史の学習が覚えることにとどまってしまう」という気づきから、生徒に「自分ならどうする？」と考えさせる工夫をし、歴史を通じて未来を予測する力を育むことに注力されていることが、素晴らしいと思った。私の担当教科の英語でも、残念ながら、「単語や文法を覚えれば、それでよい」と思っている生徒がいるため、嘉志摩先生のように、私自身が探究心を持ち、生徒の深い学びにつなげていきたい。

富山県立中央農業高校 千田なつ紀

2か月かけて就職観を醸成する、新しい視点を得た

就職希望の生徒に対して、「指導の時間があまりない」「企業に提出する書類の記入などに時間がかかる」などの理由から、3年次の7月までに、志望する企業を決定するよう指導していた。6月号の「クローズアップ！就職指導」で紹介された三重県立桑名北高校では、求人票の公開から2か月かけて生徒の就職観を醸成し、生徒と企業の望ましいマッチングを行っていた。それはこれまでの私にはなかった視点であり、目から鱗が落ちるとともに、同校の取り組みは大変参考になった。

栃木県立日光明峰高校 半田高史

\ 進路達成プログラム からスタートする / 新進路応援宣言

Well-beingを実現するための進路選択

Benesseは、ラテン語のbene(良い、正しい)とesse(生きる)を一語にした造語です。

1990年から、「よく生きる(Well-being)」を企業理念として掲げ、
事業を通してその追求を続けてきました。なかでも、高校生の進路選択は、
これからの社会で「よく生きる(Well-being)」を実現するための一歩目です。

昨今の入試制度の変化や競争の緩和を機に、学力評価だけで進路の可能性を見極めるのではなく、
一人ひとりの生徒が多様な強みを発揮できる進路選択が可能になってきました。

だからこそ、生徒が、「じぶんごと」として将来に向き合い、自分らしさや長所がより活かされる
進路先と出会ってほしい。困難に遭遇しても、自分で乗り越える力を高校時代に身につけてほしい。
そのような願いから、多様な観点で生徒の可能性を見出し、
個の特性に応じた学びと成長を支援するサービスの開発を構想しています。

高校生が、自分の人生の主人公として、学び成長し続ける姿を想い、
私たちは改めて「Well-beingを実現するための進路選択」の応援を宣言します。

2023年はその初年度として、「進路達成プログラム」や「スタディーサポート」「基礎力診断テスト」
など既存の教材・サービスの見直しを行い、上記の宣言に挑戦してまいります。



進路達成プログラム <https://www.bhso.ne.jp>

詳細はBenesse High School Onlineをご覧ください。Benesse High School Onlineのご利用には学校ID・ログインコードまたは先生個人ID・パスワードが必要です。

宮城県登米総合産業高校

阿部かおり 先生

Abe Kaori

異質さは力。
それは思いが
同じだから宮 城県登米総合産業高校は、地域の
専門系高校を再編・統合して開校
した、6学科を擁する総合産業高校です。各学科では、高い専門性を持つ産業スペシャ
リストの育成を目指した教育を展開して
います。一方で、複雑化するこれからの社
会では、専門性とともに、幅広い視野を持
つことも求められます。そのため、多彩な
学科を設置する本校の強みを生かし、学
科を超えて生徒同士がかかわり合いなが
ら、多面的に物事を考えられる力を育む
教育にも取り組んでいます。私が学年主
任を務める2学年団でも、複数の学科が共同でSDGsカードゲームを実施する
など、新しい挑戦を始めています。学科や教科を超えて教師同士がつなが
ることは、本校に限らず、すべての学校で、
今後ますます必要になってくると思いま
す。ただ、教師同士がつなが
る過程では、意見が対立
することもあります。私も
よく、若い担任の先生と教
育活動を練り直していく中
で、意見が衝突し、火花を
散らしてしまいます。それ
ぞれが専門性を備え、キャ
リアを積み重ねてきた教師
ですから、私と意見が合わ
ないことがあるのは当然の
ことです。しかし、「生徒のために」
という思いは同じです。そ
うした互いの思いを信じる
ことで、私たち教師はぶつ
かり合いながらも、教育活
動をよりよいものにし、と
もに自分自身を磨くことが
できるのです。そうした中で、次代を担う
若い先生たちが1人、また1人と、何かを
つかんでくれば、そこから何十、何百と
いう生徒に、私たち教師の熱い思いが伝
わっていく……。私はそう信じています。

生徒より

「いつでもどこでも、明るく
し元氣なのが阿部先生です。
成績が伸びた生徒が学年集会
で表彰される時は、本人以上に
阿部先生が全身で喜びを表現
しています。学校行事の後は
何人もの生徒に、「楽しかった？」
と笑顔で話しかけています。ま
るでみんなのお母さんのようで
す。先日、担任の先生が、「阿部
先生は常に生徒のことを1番に
考えている。自分も阿部先生に
ついていきたい」と、私たちに話
してくれました。先生方全員が
生徒のことを考えてくれている
のだと、とてもうれしくなり、
心が温くなりました。」

あべ・かおり 教職歴19年。同校に赴任
して5年目。2学年主任。進路指導部。
理科。

宮城県登米総合産業高校 全日制／
農業科、機械科、電気科、情報技術科、商
業科、福祉科／共学／1学年約140
人／2021年度進路実績（現役のみ）
4年制大は、札幌大、石巻専修大、仙台
大、東北学院大、日本大などに延べ11人
が合格。短大・専門学校進学38人。就職
107人。

お客様サービスセンター

フリーダイヤル 0120-350455 [受付時間] 月～金8:00～18:00／土8:00～17:00(祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17